



主催大学事務局
第74回日本血液学会学術集会 事務局
〒329-0498 栃木県下野市薬師寺3311-1
自治医科大学 内科学講座血液学部門 内
TEL:0285-58-7353



第74回日本血液学会学術集会
第74回日本血液学会学術集会

第74回

日本血液学会学術集会

The 74th Annual Meeting of the Japanese Society of Hematology

Toward the Development of Science-Based Medicine

会期 平成24年10月19日(金)～21日(日)

会場 国立京都国際会館

会長 小澤 敬也

自治医科大学
内科学講座血液学部門 主任教授

学術集会プログラム
ダイジェスト版

The 74th Annual Meeting of the Japanese Society of Hematology

JSH2012 Digest

第74回 日本血液学会学術集会

The 74th Annual Meeting of the Japanese Society of Hematology (JSH2012)



会期 平成24年(2012年)10月19日(金)～21日(日)

会場 国立京都国際会館
〒606-0001 京都市左京区宝ヶ池
TEL: 075-705-1234 FAX: 075-705-1100
URL: <http://www.icckyo.or.jp/>

会長 小澤 敬也 (自治医科大学 内科学講座血液学部門)

主催大学事務局: 第74回日本血液学会学術集会 事務局
〒329-0498 栃木県下野市薬師寺3311-1
自治医科大学 内科学講座血液学部門 内
TEL: 0285-58-7353

学術集会事務局: 第74回日本血液学会学術集会 運営事務局
株式会社コングレ 内
〒102-8481 東京都千代田区麹町5-1 弘済会館ビル6階
TEL: 03-5216-5318 FAX: 03-5216-5552
E-mail: jsh2012@congre.co.jp

学会事務局: 社団法人日本血液学会
(京都事務局)
〒606-8305 京都市左京区吉田河原町14
財団法人近畿地方発明センター 内
TEL: 075-752-2844 FAX: 075-752-2842
E-mail: info@jshem.or.jp
(東京事務局)
〒113-0033 東京都文京区本郷3-28-8 日内会館8階
TEL: 03-5844-2065 FAX: 03-5844-2066
E-mail: tokyo-office@jshem.or.jp

Contents

JSH2012 学術集会 プログラム委員会 (組織委員会)	3
会長挨拶	4
参加のご案内	6
会場までの交通案内	8
会場案内図	9
JSH2012 学術集会 日程表	12
JSH2012 学術集会 プログラム概要	16

要旨集

会長講演	31
Special Lecture	32
特別講演	32
ASH Special Lecture	33
EHA Special Lecture	33
Presidential Symposium	34
JSH-ASH Joint Symposium	36
JSH-EHA Joint Symposium.....	38
Asian Joint Symposium	40
シンポジウム 1～7	42
パネルディスカッション	49
ワークショップ 1、2	50
教育講演 一覧	52
教育講演 要旨	58
Meet-the-Professional 討論要旨.....	62
Morning Discussion (Meet-the-Expert) 討論要旨	64

コーポレートセミナーのご案内

コーポレートセミナー 一覧	68
コーポレートパートナー	74

JSH2012学術集会 プログラム委員会(組織委員会)

委員長(第74回学術集会会長)

小澤 敬也(自治医科大学 内科学講座血液学部門)

プログラム企画委員長

松村 到(近畿大学医学部 血液内科)

プログラム企画副委員長

木崎 昌弘(埼玉医科大学総合医療センター 血液内科)

領域別委員長・小児科委員(50音順)

飯田 真介(名古屋市立大学大学院医学研究科 腫瘍・免疫内科学)

伊藤 悦朗(弘前大学 医学部附属病院 小児科学)

岩間 厚志(千葉大学大学院医学研究院 先端応用医学講座細胞分子医学)

大西 一功(浜松医科大学附属病院 腫瘍センター)

神田 善伸(自治医科大学附属さいたま医療センター 血液科)

下田 和哉(宮崎大学医学部 内科学講座消化器血液学分野)

飛内 賢正(国立がん研究センター中央病院 血液腫瘍科・造血幹細胞移植科)

中尾 眞二(金沢大学大学院医学系研究科 細胞移植学)

前川 平(京都大学医学部附属病院 輸血細胞治療部)

水谷 修紀(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 発達病態学小児科学分野)

矢富 裕(東京大学大学院医学系研究科 臨床病態検査医学)

会長指名委員(50音順)

尾崎 勝俊(自治医科大学 内科学講座血液学部門)

鈴木 隆浩(自治医科大学 内科学講座血液学部門)

永井 正(自治医科大学 内科学講座血液学部門)

理事長

金倉 譲(大阪大学大学院医学系研究科 血液・腫瘍内科学)

副理事長

須田 年生(慶應義塾大学医学部 発生・分化生物学)

第73回学術集会会長

直江 知樹(名古屋大学大学院医学系研究科 血液・腫瘍内科学)

第75回学術集会会長

澤田 賢一(秋田大学医学部 内科学第3講座(第3内科))

第74回日本血液学会学術集会 (JSH2012) の開催に向けて



第74回日本血液学会学術集会
会長 小澤 敬也 (自治医科大学 内科学講座血液学部門)

この度、第74回日本血液学会学術集会 (JSH2012) の会長を務めさせていただくことになりました。平成24年10月19日 (金) ~ 21日 (日) の3日間、国立京都国際会館での開催を予定しております。

本学術集会は、日本臨床血液学会との統合、国際化の推進、数多くの新規治療薬の登場などを背景に、目を見張るような発展を遂げています。現在では参加者は5000名を超える活況を呈しております。一方で、血液内科や小児血液を専攻する若手医師が最近では減少してきており、特に地方では深刻な問題となっています。若手の活性化が次に続く世代を引き寄せる大きな原動力となりますが、そのために学術集会が果たす役割は大きいと思います。JSH2012がより一層魅力的で、若手が積極的に参加したくなるように、様々な工夫を考えております。

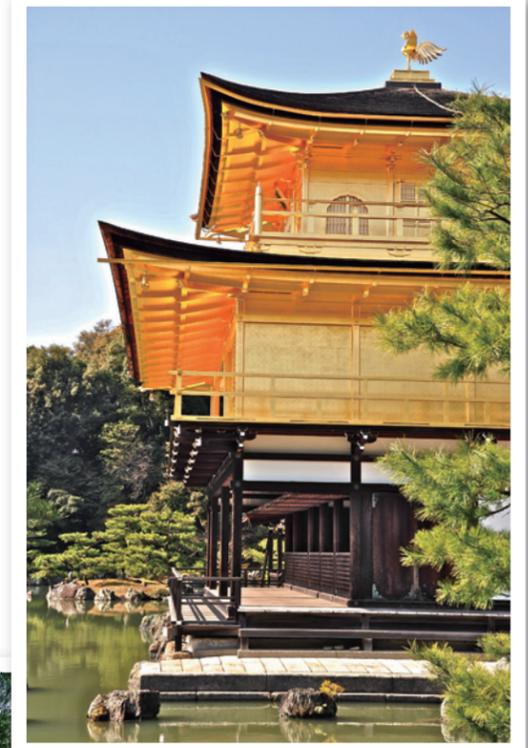
このダイジェスト版は、JSH2012のメイン・プログラムの概要をいち早く会員の皆様に御紹介するため、コンパクトな体裁で作成し、お届けすることにしたものです。今年の学術集会への参加計画を練る際に、是非御活用いただければと思います。

さて、JSH2012ではメイン・テーマを“Toward the Development of Science-Based Medicine”とし、Presidential Symposiumではこれからの医療の発展の方向性を探る予定です。国際化によりASH (米国血液学会) 及びEHA (ヨーロッパ血液学会) との連携が軌道に乗ってきましたが、今回はさらにAsian Joint Symposiumも企画しました。パネルディスカッションは、学会が総力を挙げて作成している「造血器腫瘍ガイドライン」の紹介を兼ねた内容とする予定です。好評の教育講演については、前回同様、一部はメインホールも利用します。その他、第一線の専門家との少人数のMorning Discussion (Meet-the-Expert) に加え、先駆者として活躍された先輩を囲んだMeet-the-Professionalといった新企画もあり、若手の参加を期待しております。

例年にも増して盛り沢山のプログラムとなっておりますが、iPhoneやiPadを活用してMyスケジュール・Myアブストラクトを各自作成し、効率良く御参加いただきたいと思っております。

学術集会終了後は、秋の京都も是非お楽しみ下さい。丁度翌日 (10月22日) は時代祭が開催される予定です。

以上、魅力ある学術集会の開催に向けて、JSH2012プログラム委員会一同、鋭意準備を進めております。今年も数多くの皆様の御参加と御支援を宜しくお願い申し上げます。



参加のご案内

1. 参加費

ご参加の方は参加費として15,000円お支払いください。新研修医制度における初期研修医、非MDの大学院生、学部学生、留学生は参加費が無料です。参加費免除申請書と学生証を当日、総合受付にお持ちください。事後返金は受け付けませんのでご注意ください。なお、**本学術集会のみ試験的に事前参加登録を行います。参加費は当日と同様です。9月初旬より1ヶ月間受付を行います。**

詳細はホームページ<http://www.congre.co.jp/jsh2012/>をご確認ください。

参加費受付は、10月19日(金)、20日(土)、21日(日)の午前8時から国立京都国際会館1F イベントホールで行います。

参加費と引き換えに参加証(ネームカード)をお受け取りの上、各自で所属と氏名をご記入ください。この参加証は、領収書を兼ねると同時に、**日本血液学会血液専門医の更新手続き**の際に、学会出席を証明するものとなりますので、各自大切に保管してください。なお、この参加証のない方の講演会場および展示会場への入場はお断りいたします。

※日本血液学会血液専門医更新時の学術集会参加単位は、15点となります。

2. プログラム・抄録集

本ダイジェスト版、プログラム・抄録集および雑誌「臨床血液」(教育講演特集号)は、日本血液学会事務局から会員の方にお送りしております。学会当日は忘れずにご持参ください。また、プログラム・抄録集は当日総合受付でも有料でお求めいただけますが、お忘れの際も同様の取り扱いとなりますのでご注意ください。

なお、学会参加者には当日、受付でポケットプログラムをお渡しいたします。

また、Web版、Mobile・タブレット版のスケジュール検索も可能となります。詳細はホームページ<http://www.congre.co.jp/jsh2012/>をご確認ください。

3. 関連行事

代議員会・会員総会

日 時：平成24年10月19日(金) 17時50分～18時50分
会 場：国立京都国際会館 1F メインホール(第1会場)

会員懇親会

日 時：平成24年10月20日(土) 18時40分～20時30分
会 場：国立京都国際会館 1F スワン・庭園
会 費：3,000円

4. コーポレートセミナー

学会会期中、昼食時にコーポレートパートナー企業によるランチョンセミナーを開催いたします。

セミナーへ参加希望の方は、事前にランチョンセミナー整理券発券カウンターにて整理券をお受け取りください。整理券は第1会場(メインホール)前にて発券いたします。整理券発行の際は学会参加証が必要です。おひとり1日1枚のみ受け取り可能です。発券する整理券は当日開催分のみで、なくなり次第発券は終了いたします。

セミナー会場には整理券をお持ちの方を優先的にご案内いたしますが、整理券をお持ちの方でもセミナー開始後10分を過ぎると入場できない場合がございますので、予めご了承ください。

5. 軽食配布について

19日(金)、20日(土)の昼食時及び19日(金)のポスター発表時、ポスター・機器展示会場(イベントホール)にて軽食を配布いたします。数に限りがありますので、予めご了承ください。

6. 医薬品・医療機器展示・展示ルームのご案内

学会会期中、コーポレートパートナー企業による展示ルームを会場内「イベントホール」「さくら」「Room G」「103」「104」に設け、各社による展示や製品説明などを行います。学会参加者はご自由にご利用ください。

1日目：10月19日(金) 9時～18時

2日目：10月20日(土) 9時～18時

3日目：10月21日(日) 9時～15時

7. ベビーシッタールームのご案内

学会会期中、ベビーシッタールームを設けます(無料)。お預かりできるお子様の数に限りがありますので、ご利用にあたっては必ず事前のご予約が必要となります(申込期限：10月11日(木))。ホームページに掲載されている利用規約をご確認のうえお申し込みください。

8. 無線LANについて

イベントホール、メインホール、メインホール前ラウンジにて無線LANの利用が可能です。

9. お願い

- ・会場内は禁煙です。
- ・講演、ポスター会場内での携帯電話・スマートフォン等のご使用は他の参加者の迷惑となりますので、禁止させていただきます。入場の際は電源を必ずOFFにしてくださいようお願いいたします。
- ・発表スライドおよびポスターの写真撮影は禁止します。
- ・会場内での呼び出しは原則として行いません。総合案内にございます掲示板をご利用下さい。但し、緊急の場合は運営本部へご連絡ください。

運営本部：国立京都国際会館 1F [157]

TEL：075-705-2001(学会会期中)

会場までの交通案内



国立京都国際会館

〒606-0001 京都市左京区宝ヶ池
TEL : 075-705-1234 FAX : 075-705-1100

グランドプリンスホテル京都 (10月19日のみ)

〒606-8505 京都市左京区宝ヶ池
TEL : 075-712-1111 FAX : 075-712-1119

【JR京都駅までのアクセス】

京都駅までの所要時間は、関西国際空港から特急「はるか」で約75分、大阪伊丹空港からはリムジンバスで約55分。首都圏からは新幹線「のぞみ」で約2時間15分。

【電車でのアクセス】

JR京都駅から市営地下鉄烏丸線で約20分
市営地下鉄烏丸線「国際会館駅」下車

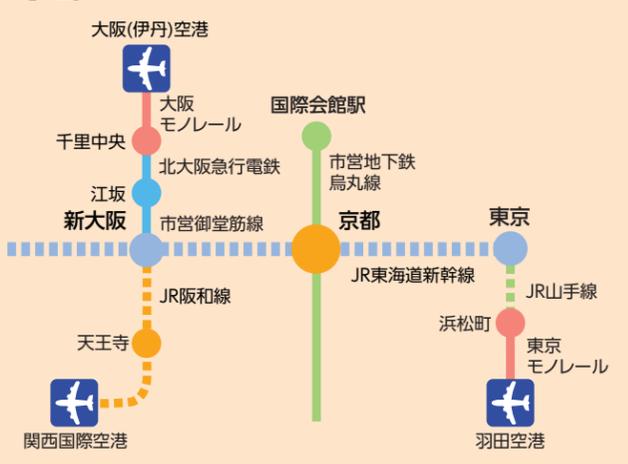
【最寄り駅から】

市営地下鉄烏丸線「国際会館駅」から徒歩5分
改札から地下通路を通り出入口4-2をご利用ください。
出入口からは、歩廊に沿って雨に濡れずに正面玄関までお越し頂けます。

【お車をご利用のお客様】

市内中心部からタクシーで平常時約25分
京都駅からタクシーで平常時約30分、関西国際空港からは約1時間30分です。
名神高速道路京都南I.C.、京都東I.C.から平常時約40分です。
堀川通または烏丸通を北山通まで北上し、宝ヶ池通りよりお越しください。

京都までのアクセス

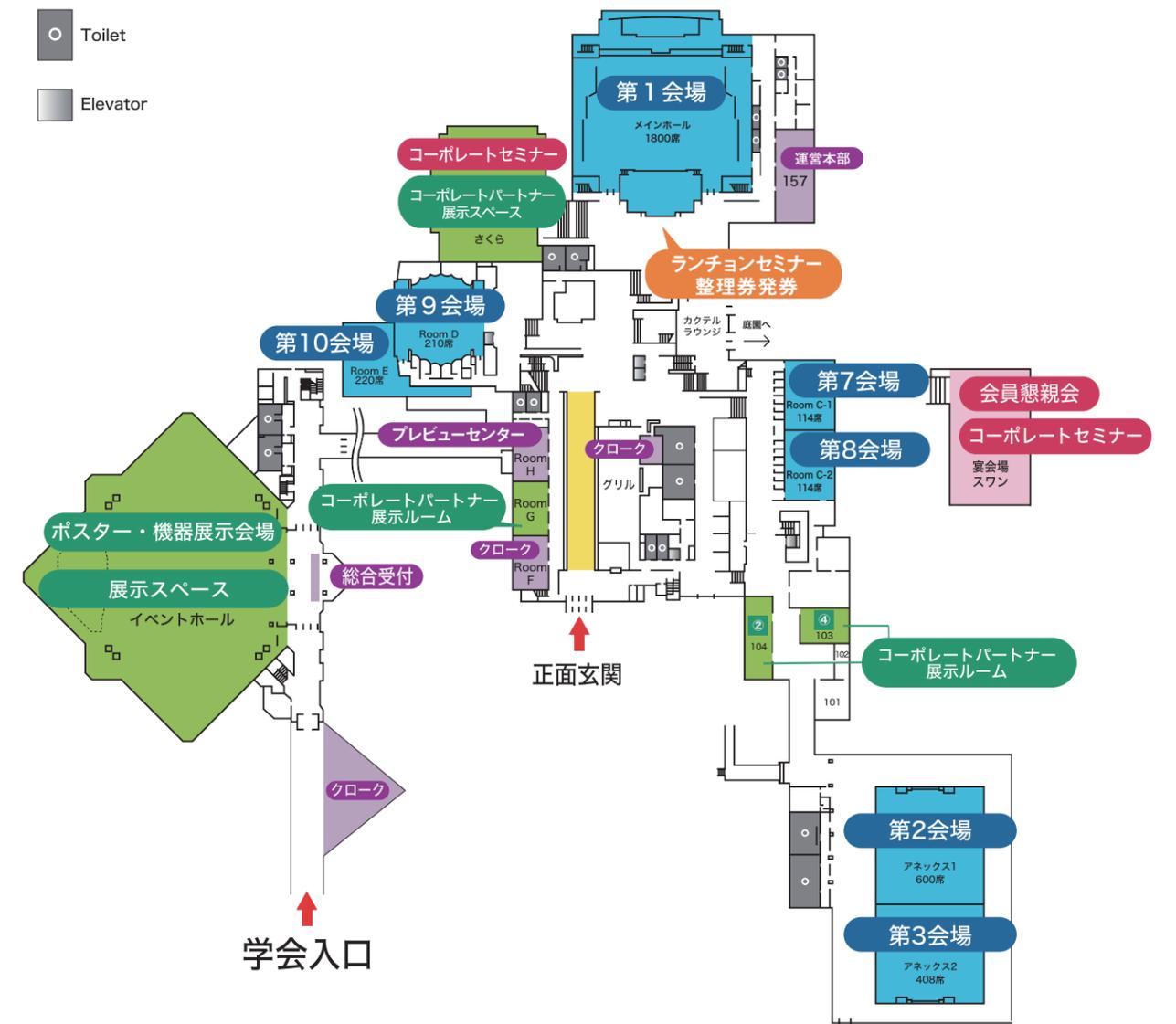


会場案内図

国立京都国際会館

1F

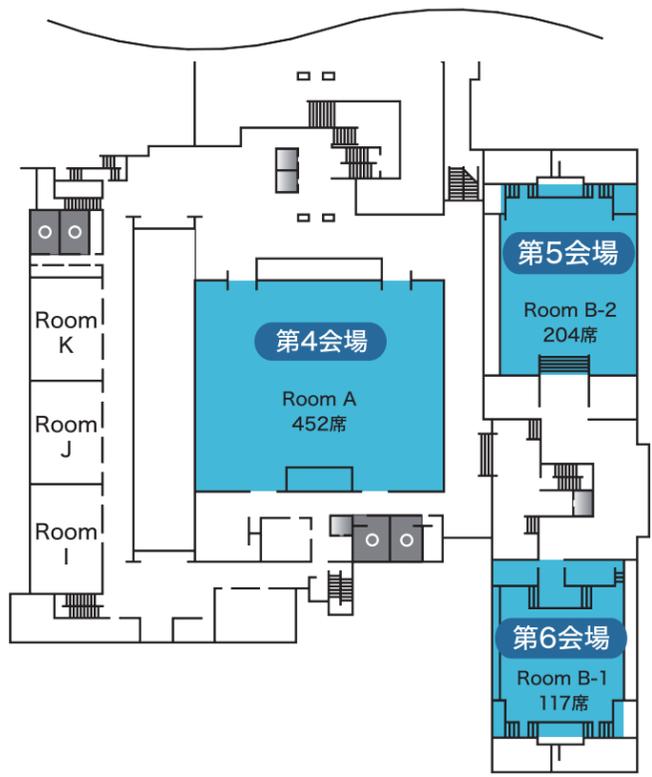
Toilet
Elevator



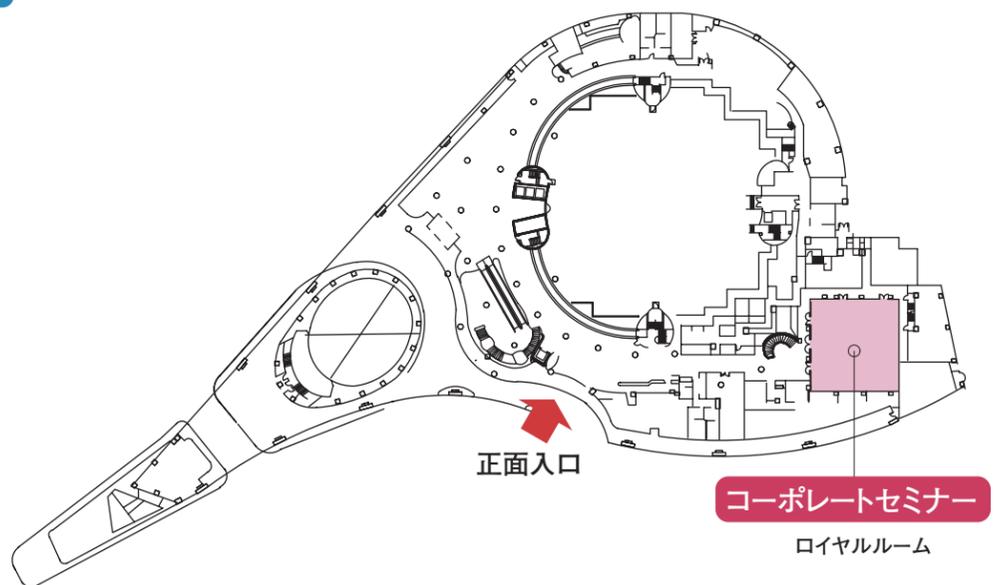
学術集会の参加登録受付はイベントホール内となります。通常の正面玄関と入口が異なりますのでご注意ください。なお、通常の正面玄関からも出入りは可能です。

グランドプリンスホテル京都

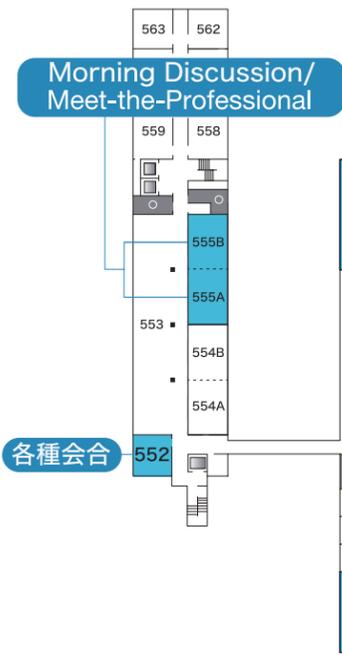
2F



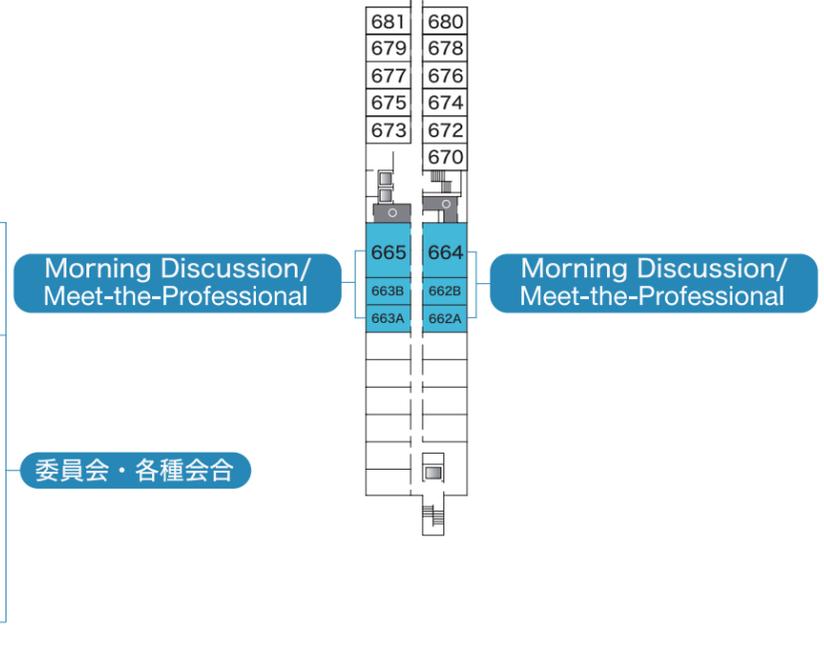
1F



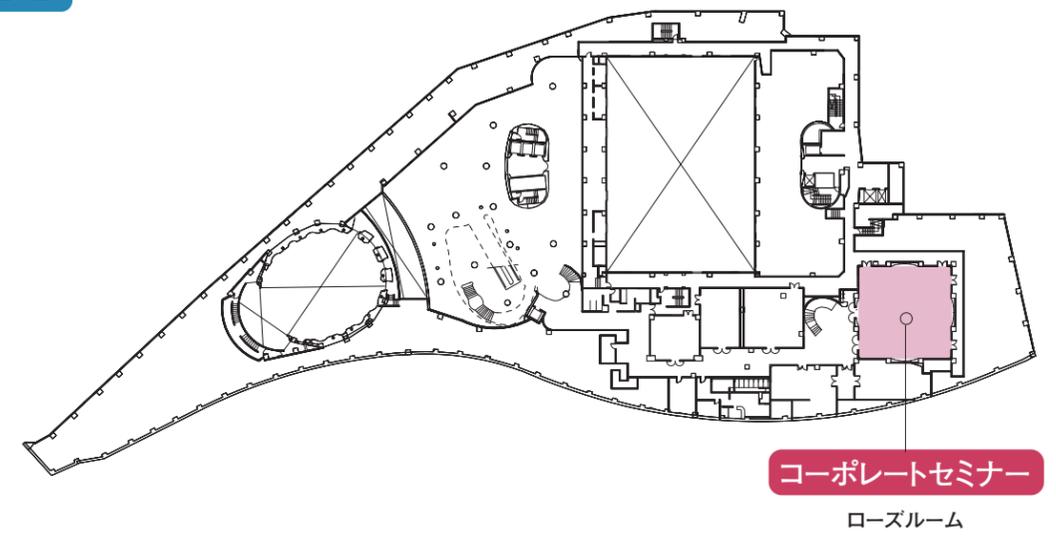
5F



6F



B1F



第1日目10月19日(金)のみ、コーポレートセミナー会場となります。

JSH2012 学術集会 日程表

Eは英語発表です。

● 第1日目 10月19日(金)

国立京都国際会館

	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00
第1会場 (メインホール 1F)			教育 HL-1	教育 HL-2	教育 NHL-1	教育 NHL-2	E Special Lecture	会長講演	E Presidential Symposium (Gene & Cell Therapy)				総会	
第2会場 (アネックス1 1F)		開会式	教育 ALL-1	教育 ALL-2	教育 テロメア	E 教育 原発事故	E EHA Special Lecture	コーポレートセミナー1	教育 CML-1	教育 CML-2	教育 MPN-1	教育 MPN-2		
第3会場 (アネックス2 1F)			E Symposium 1 (ITP)				コーポレートセミナー2	教育 DIC	教育 HIT	教育 VTE	教育 血友病			
第4会場 (Room A 2F)			E Symposium 2 (Epigenomics)				コーポレートセミナー3	E Symposium 3 (AML)						
第5会場 (Room B-1 2F)			一般口演	一般口演			コーポレートセミナー4	一般口演	一般口演					
第6会場 (Room B-2 2F)			一般口演	一般口演			コーポレートセミナー5	一般口演	一般口演					
第7会場 (Room C-1 1F)			一般口演	E 一般口演			コーポレートセミナー6	一般口演	一般口演					
第8会場 (Room C-2 1F)			一般口演	一般口演			コーポレートセミナー7	一般口演	一般口演					
第9会場 (Room D 1F)			一般口演	一般口演			コーポレートセミナー8	一般口演	一般口演					
第10会場 (Room E 1F)			E 一般口演	一般口演			コーポレートセミナー9	一般口演	一般口演					
コーポレートセミナー会場 (さくら 1F)							コーポレートセミナー10							
コーポレートセミナー会場 (スワン 1F)			一般口演	一般口演			コーポレートセミナー11	E 一般口演	一般口演					
ポスター・機器展示会場 (イベントホール 1F)			ポスター貼付 8:30~10:00			ポスター掲示 10:00~16:10		ポスター掲示 10:00~16:10	ポスター討論 16:10~17:40	ポスター撤去 18:00~19:30				
機器展示会場 (さくら 1F)						医薬品・医療機器展示 9:00~18:00		医薬品・医療機器展示 9:00~18:00						
企画会場 (5F・6F 会議室)						軽食配布		コーポレートパートナー展示 9:00~18:00						
							Meet-the-Professional							

グランドプリンスホテル京都

コーポレートセミナー会場 (ロイヤルルーム 1F)								コーポレートセミナー12						
コーポレートセミナー会場 (ローズルーム B1F)								コーポレートセミナー13						

JSH2012 学術集会 日程表

Eは英語発表です。

● 第2日目 10月20日(土)

国立京都国際会館

	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00
第1会場 (メインホール 1F)			教育 AML-1	教育 AML-2	教育 MM-1	教育 MM-2	特別講演		E Plenary Session	E JSH-ASH Joint Symposium (Malignant Lymphoma)				
第2会場 (アネックス1 1F)			E JSH-EHA Joint Symposium (BM Failure)			E ASH Special Lecture	コーポレートセミナー14		教育 BMF-1~3	教育 MDS	教育 PNH			
第3会場 (アネックス2 1F)			教育 統計	教育 規制科学	教育 白血病幹細胞	教育 幹細胞	コーポレートセミナー15		E 教育 Imaging	E 教育 Stem cell GT	教育 iPS	教育 造血アッセイ		
第4会場 (Room A 2F)			E Symposium 4 (MSC)				コーポレートセミナー16		E Symposium 5 (造血幹細胞移植)					
第5会場 (Room B-1 2F)			一般口演	一般口演			コーポレートセミナー17		一般口演	一般口演				
第6会場 (Room B-2 2F)			一般口演	一般口演			コーポレートセミナー18		一般口演	一般口演				
第7会場 (Room C-1 1F)			一般口演	一般口演			コーポレートセミナー19		一般口演	一般口演				
第8会場 (Room C-2 1F)			一般口演	一般口演			コーポレートセミナー20		一般口演	一般口演				
第9会場 (Room D 1F)			一般口演	一般口演			コーポレートセミナー21		E 一般口演	一般口演				
第10会場 (Room E 1F)			一般口演	一般口演			コーポレートセミナー22		一般口演	一般口演				
コーポレートセミナー会場 (さくら 1F)							コーポレートセミナー23							
コーポレートセミナー会場 (スワン 1F)			E 一般口演	一般口演			コーポレートセミナー24						懇親会 18:40~20:30	
ポスター・機器展示会場 (イベントホール 1F)			ポスター貼付 8:30~10:00			ポスター掲示 10:00~17:00		ポスター掲示 10:00~17:00	ポスター討論 17:00~18:30	ポスター撤去 19:00~20:30				
機器展示会場 (さくら 1F)						医薬品・医療機器展示 9:00~18:00		医薬品・医療機器展示 9:00~18:00						
企画会場 (5F・6F 会議室)						軽食配布		コーポレートパートナー展示 9:00~18:00						
							Morning Discussion		Meet-the-Professional					

JSH2012 学術集会 日程表

E は英語発表です。

● 第3日目 10月21日(日)

国立京都国際会館

	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00
第1会場 (メインホール 1F)			E Symposium 6 (Myeloma)		学会賞 受賞 講演		パネルディスカッション (造血器腫瘍ガイドライン)		閉会式					
第2会場 (アネックス1 1F)			教育 HBV	教育 NHL-3	教育 NK/T	教育 ATL	コーポレート セミナー 25	教育 分子 標的	教育 MM-3	教育 免疫 療法	教育 放射線 被曝			
第3会場 (アネックス2 1F)			教育 移植 感染症	教育 移植 病理	教育 免疫系	教育 好塩 基球	コーポレート セミナー 26	教育 免疫 不全症	教育 EBV	教育 TRALI	教育 感染症			
第4会場 (Room A 2F)			ワークショップ1 高齢者白血病・ リンパ腫		ワークショップ2 血液疾患の 不妊対策		コーポレート セミナー 27	Symposium 7 (CML/MDS)						
第5会場 (Room B-1 2F)			一般口演	一般口演			コーポレート セミナー 28	一般口演	一般口演					
第6会場 (Room B-2 2F)			一般口演	一般口演			コーポレート セミナー 29	E 一般口演	一般口演					
第7会場 (Room C-1 1F)			E 一般口演	E 一般口演			コーポレート セミナー 30	一般口演	一般口演					
第8会場 (Room C-2 1F)			一般口演	一般口演			コーポレート セミナー 31	一般口演	一般口演					
第9会場 (Room D 1F)			E Asian Joint Symposium (Acute leukemia)				コーポレート セミナー 32	公開シンポジウム						
第10会場 (Room E 1F)			一般口演	一般口演			コーポレート セミナー 33	一般口演	一般口演					
コーポレートセミナー会場 (さくら 1F)							コーポレート セミナー 34							
コーポレートセミナー会場 (スワン 1F)							コーポレート セミナー 35	E Asian Symposium on Cord Blood Transplantation 2012						
ポスター・機器 展示会場 (イベントホール 1F)			医薬品・医療機器展示 9:00 ~ 15:00											
機器展示会場 (さくら 1F)			コーポレートパートナー展示 9:00 ~ 15:00											
企画会場 (5F・6F 会議室)		Morning Discussion												



JSH2012 学術集会 プログラム概要

◆ 10月19日(金) 午前

9:00-11:10	シンポジウム 1 (要旨p.42) 免疫性血小板減少性紫斑病 (ITP) 研究の最前線 The Research Front Line of Immune Thrombocytopenia 座長 大森 司 (自治医科大学)・矢富 裕 (東京大学)	【第3会場 アネックス2】 発表言語：英語 E
	<ol style="list-style-type: none"> 1 Pathophysiology and diagnosis of primary immune thrombocytopenia 富山 佳昭 (大阪大学附属病院) 2 Current management of immune thrombocytopenia in Japan 宮川 義隆 (慶應義塾大学 内科学(血液)) 3 Thrombopoietin mimetics for the treatment of ITP David J. Kuter (Department of Hematology, Harvard Medical School, USA) 4 Chronic immune thrombocytopenia as a disease with or without association of defined diseases in children 高木 正稔 (東京医科歯科大学 生体応答学 発生発達病態学) 5 Thrombocytopenia in the antiphospholipid syndrome Ricard Cervera (Department of Autoimmune Diseases, Hospital Clinic, Spain) 	
9:00-11:10	シンポジウム 2 (要旨p.43) エピゲノム制御と造血・癌 Epigenomics of Hematopoiesis and Cancer 座長 仲野 徹 (大阪大学)・牛島 俊和 (国立がん研究センター研究所)	【第4会場 Room A】 発表言語：英語 E 共催：JCA (日本癌学会)
	<ol style="list-style-type: none"> 1 Role of the polycomb group proteins in the restriction of tumor development 岩間 厚志 (千葉大学 細胞分子医学) 2 H3K27 methylation regulators and their roles in acute leukemia Iannis Aifantis (Department of Pathology, NYU School of Medicine, Howard Hughes Medical Institute, USA) 3 Regulation of histone modifications in hematopoietic and leukemic stem cells 北林 一生 (国立がん研究センター研究所 分子標的研究グループ) 4 Aberrant DNA methylation - Its origin and diagnostic applications 牛島 俊和 (国立がん研究センター研究所 エピゲノム解析分野) 5 Cancer epigenetics: New drugs and paradigms Frank Lyko (Division of Epigenetics, German Cancer Research Center, Germany) 	
11:15-12:00	Special Lecture (要旨p.32) 座長 小澤 敬也 (自治医科大学)	【第1会場 メインホール】 発表言語：英語 E
	Aplastic anemia, telomere attrition, and the new telomeropathies Neal S. Young (Hematology Branch, NHBLI, NIH, USA)	
11:15-12:00	EHA Special Lecture (要旨p.33) 座長 直江 知樹 (名古屋大学)	【第2会場 アネックス1】 発表言語：英語 E
	Maintenance therapy in lymphoma Ulrich Jäger (Department of Medicine I, Medical University of Vienna (MUW), Austria)	

9:00-9:30	教育講演 ホジキンリンパ腫の診断と治療：Update in 2012 HL-1 【第1会場 メインホール】 座長 阿部 正文 (福島県立医科大学) ホジキンリンパ腫の病理診断 田丸 淳一 (埼玉医科大学総合医療センター)
9:30-10:00	教育講演 ホジキンリンパ腫の診断と治療：Update in 2012 HL-2 【第1会場 メインホール】 座長 高折 晃史 (京都大学) ホジキンリンパ腫の標準治療と Research Questions 鈴木 達也 (名古屋第二赤十字病院 血液・腫瘍内科)
10:10-10:40	教育講演 非ホジキンリンパ腫の標準治療：Update in 2012 NHL-1 【第1会場 メインホール】 座長 木下 朝博 (愛知県がんセンター中央病院) 濾胞性リンパ腫の標準治療と Research Questions 石澤 賢一 (東北大学 血液分子治療学寄附講座)
10:40-11:10	教育講演 非ホジキンリンパ腫の標準治療：Update in 2012 NHL-2 【第1会場 メインホール】 座長 小椋 美知則 (名古屋第二赤十字病院) びまん性大細胞型B細胞リンパ腫の標準治療と Research Questions 山本 一仁 (愛知県がんセンター中央病院 血液・細胞療法部)
9:00-9:30	教育講演 急性リンパ性白血病 ALL-1 【第2会場 アネックス1】 座長 坂巻 壽 (都立駒込病院) 成人ALLの治療方針 竹内 仁 (日本大学 血液膠原病内科学分野)
9:30-10:00	教育講演 急性リンパ性白血病 ALL-2 【第2会場 アネックス1】 座長 林 泰秀 (群馬県立小児医療センター) 小児ALLの治療方針 堀部 敬三 (名古屋医療センター 臨床研究センター)
10:10-10:40	教育講演 トピックス テロメア (要旨p.59) 【第2会場 アネックス1】 座長 浦部 晶夫 (NTT関東病院) テロメアと発癌 石川 冬木 (京都大学 細胞周期学分野)
10:40-11:10	教育講演 トピックス 原発事故 (要旨p.60) 【第2会場 アネックス1】 座長 浅野 茂隆 (早稲田大学/東京大学 名誉教授) 発表言語：英語 E Medical consequences of nuclear accidents: Chernobyl and Fukushima Robert Peter Gale (Section of Haematology, Division of Experimental Medicine, Department of Medicine, Imperial College, UK)
9:00-11:10	一般口演

◆ 10月19日(金) 午後

13:10-13:45 **会長講演** (要旨p.31) 【第1会場 メインホール】
座長 高久 史磨 (日本医学会 会長/自治医科大学 名誉学長)
Toward the development of science-based medicine: トランスレーショナル・リサーチの推進
 小澤 敬也 (自治医科大学 内科学講座血液学部門)

13:50-16:00 **Presidential Symposium** (要旨p.34) 【第1会場 メインホール】
血液疾患に対する革新的遺伝子/細胞療法 Innovative Gene & Cell Therapy for Hematological Diseases 発表言語: 英語 E

座長 小澤 敬也 (自治医科大学) ・ Renier J. Brentjens (Department of Medicine, Leukemia Service, Memorial Sloan Kettering Cancer Center, USA)

- Chimeric antigen receptor (CAR) modified T cells as a novel approach to cancer immunotherapy: Initial promising clinical responses and future directions**
Renier J. Brentjens (Department of Medicine, Leukemia Service, Memorial Sloan Kettering Cancer Center, USA)
- Gene therapy for hemophilia**
Katherine A. High (Perelman School of Medicine at the University of Pennsylvania / Howard Hughes Medical Institute / The Children's Hospital of Philadelphia, USA)
- Genome editing with engineered zinc finger nucleases**
Philip D. Gregory (Sangamo BioSciences Inc, USA)
- iPS cell research using large animals**
花園 豊 (自治医科大学分子病態治療研究センター 再生医学研究部)

13:50-16:00 **シンポジウム 3** (要旨p.44) 【第4会場 Room A】
骨髄系腫瘍-新規分子標的治療の展望 共催: JSMO (日本臨床腫瘍学会) 発表言語: 英語 E
Myeloid Malignancies in a New Era of Molecularly Targeted Therapy

座長 清井 仁 (名古屋大学) ・ 田村 和夫 (福岡大学)

- Cancer stem cell research for innovative cell-modifying technologies**
石井 秀始 (大阪大学 消化器癌先進科学療法開発学 寄附講座)
- DNA hydroxymethylation in hematologic malignancies**
坂田 (柳元) 麻実子 (筑波大学 血液内科)
- Novel molecularly targeted therapy targeting resistant signals**
矢野 聖二 (金沢大学 がん高度先進治療センター)
- Prognostic, predictive and therapeutic role of microRNAs in AML**
Guido Marcucci (Division of Hematology, The Ohio State University Medical Center, Comprehensive Cancer Center, USA)
- Role of molecular diagnostics and MRD to guide therapy in AML**
Farhad Ravandi-Kashani (Department of Leukemia, University of Texas-MD Anderson Cancer Center, USA)

12:10-13:00 **Meet-the-Professional** (要旨p.62) 【企画会場 5F・6F会議室】

- 若手医師に魅力ある科にするために一血液診療医を増やす方策を考える**
大野 竜三 (愛知県がんセンター 名誉総長)
- 新規siRNA治療薬開発の米国での経験**
新津 洋司郎 (札幌医科大学 分子標的探索講座)
- 造血幹細胞移植**
原田 実根 (大牟田病院)
- 有効な薬を早く届けるために**
堀田 知光 (国立がん研究センター 理事長)

13:50-14:20 **教育講演 慢性骨髄性白血病 CML-1** 【第2会場 アネックス1】
座長 薄井 紀子 (東京慈恵会医科大学附属第三病院)

CMLの標準治療
木村 晋也 (佐賀大学 血液・呼吸器・腫瘍内科)

14:20-14:50 **教育講演 慢性骨髄性白血病 CML-2** 【第2会場 アネックス1】
座長 檀 和夫 (日本医科大学)

CML: 治療関連有害事象のマネージメント
高橋 直人 (秋田大学 第3内科 (血液腎臓膠原病内科))

15:00-15:30 **教育講演 骨髄増殖性腫瘍 MPN-1** 【第2会場 アネックス1】
座長 東條 有伸 (東京大学医科学研究所)

PV, ET, PMFの分子病態と治療総論
小松 則夫 (順天堂大学 血液内科)

15:30-16:00 **教育講演 骨髄増殖性腫瘍 MPN-2** 【第2会場 アネックス1】
座長 片山 直之 (三重大学)

JAK2阻害薬によるMPNの治療
幣 光太郎 (宮崎大学 消化器血液学分野)

13:50-14:20 **教育講演 血栓・止血 DIC** 【第3会場 アネックス2】
座長 松下 正 (名古屋大学)

DICの臨床
朝倉 英策 (金沢大学附属病院 高密度無菌治療部)

14:20-14:50 **教育講演 血栓・止血 HIT** 【第3会場 アネックス2】
座長 尾崎 由基男 (山梨大学)

ヘパリン起因性血小板減少症
宮田 茂樹 (国立循環器病研究センター 輸血管理室)

15:00-15:30 **教育講演 血栓・止血 VTE** (要旨p.58) 【第3会場 アネックス2】
座長 小嶋 哲人 (名古屋大学)

避難環境と静脈血栓塞栓症: 東日本大震災による検診結果から
榛沢 和彦 (新潟大学 呼吸器循環外科/新潟大学災害・復興科学研究所)

15:30-16:00 **教育講演 血栓・止血 血友病** 【第3会場 アネックス2】
座長 坂田 洋一 (自治医科大学)

血友病治療の新たな動向
嶋 緑倫 (奈良県立医科大学 小児科)

13:10-16:00 **一般口演**

16:10-17:40 **ポスター討論 (ミニ懇親会)** 【ポスター展示会場 イベントホール】

12:10-13:00 **コーポレートセミナー 1~13**

◆ 10月20日(土) 午前

9:00-11:10 **JSH-EHA Joint Symposium** (要旨p.38) 【第2会場 アネックス1】
骨髄不全症候群の病態
Pathophysiology of Bone Marrow Failure Syndromes
 座長 中熊 秀喜 (和歌山県立医科大学)・Mario Cazzola (University of Pavia, Italy)
 1 **Preferential activation of hematopoietic stem cells with genetic alterations in patients with acquired aplastic anemia**
 中尾 眞二 (金沢大学 細胞移植学)
 2 **The molecular basis of myelodysplastic syndromes and its clinical relevance**
 Mario Cazzola (Department of Hematology Oncology, Fondazione IRCCS Policlinico San Matteo, and Department of Molecular Medicine, University of Pavia, Italy)
 3 **Similarities and differences between hypoplastic refractory cytopenia and aplastic anemia in children**
 小島 勢二 (名古屋大学 発育・加齢医学 (小児科学))
 4 **The pathophysiology of PNH: Lessons from targeted therapy**
 Peter Hillmen (Department of Haematology, St. James's Institute of Oncology, UK)

9:00-11:10 **シンポジウム 4** (要旨p.45) 【第4会場 Room A】
間葉系幹細胞：造血幹細胞移植への臨床応用に向けた進歩
Mesenchymal Stem Cells: Progress Toward Clinical Application for Hematopoietic Stem Cell Transplantation
 座長 前川 平 (京都大学)・森尾 友宏 (東京医科歯科大学)
 1 **Clinical development of MSC for the treatment of steroid refractory acute GVHD in Japan**
 立花 克彦 (日本ケミカルリサーチ株式会社 開発本部)
 2 **Mesenchymal stem cells for treatment of Graft-Versus-Host Disease**
 Katarina Le Blanc (Laboratory Medicine, Herm, Karolinska Institutet, Sweden)
 3 **Regulation of hematopoiesis by mesenchymal stem cells**
 三浦 康生 (京都大学附属病院 輸血細胞治療部)
 4 **Mesenchymal stem cells expand the spectrum of cell therapy**
 Edwin M. Horwitz (Division of Oncology/Blood and Marrow Transplantation The Children's Hospital of Philadelphia, The University of Pennsylvania Perelman School of Medicine, USA)
 5 **Mesenchymal stem cell-based therapy -bench to bed-**
 梅澤 明弘 (国立成育医療研究センター 再生医療センター)

11:15-12:00 **特別講演** (要旨p.32) 【第1会場 メインホール】
 座長 金倉 譲 (大阪大学)
医学研究の要素とシステム：循環器研究の立場から
 永井 良三 (自治医科大学 学長)

11:15-12:00 **ASH Special Lecture** (要旨p.33) 【第2会場 アネックス1】
 座長 須田 年生 (慶應義塾大学) 発表言語：英語 E
Therapy with mesenchymal stromal cells: Evolving concepts of action
 Armand Keating (Department of Cell Therapy, Princess Margaret Hospital / The University of Toronto, Canada)

9:00-11:10 **一般口演**

9:00-9:30 **教育講演 急性骨髄性白血病 AML-1** 【第1会場 メインホール】
 座長 恵美 宣彦 (藤田保健衛生大学)
AMLの分子病態と診断
 麻生 範雄 (熊本大学 血液内科学)
 9:30-10:00 **教育講演 急性骨髄性白血病 AML-2** 【第1会場 メインホール】
 座長 宮脇 修一 (東京都立大塚病院)
AMLの治療
 大竹 茂樹 (金沢大学 病態検査学)
 10:10-10:40 **教育講演 骨髄腫 MM-1** 【第1会場 メインホール】
 座長 清水 一之 (愛知学院大学)
多発性骨髄腫の標準治療
 得平 道英 (埼玉医科大学総合医療センター 血液内科)
 10:40-11:10 **教育講演 骨髄腫 MM-2** 【第1会場 メインホール】
 座長 張 高明 (新潟県立がんセンター新潟病院)
多発性骨髄腫の合併症とそのマネージメント(骨病変・腎障害・末梢神経障害)
 坂井 晃 (福島県立医科大学 放射線生命科学講座)

9:00-9:30 **教育講演 一般 統計** 【第3会場 アネックス2】
 座長 上田 孝典 (福井大学)
臨床研究論文の読み方—統計を中心に—
 熱田 由子 (名古屋大学 造血細胞移植情報管理・生物統計学)

9:30-10:00 **教育講演 一般 規制科学** (要旨p.59) 【第3会場 アネックス2】
 座長 堀田 知光 (国立がん研究センター 理事長)
再生医療／細胞治療とレギュラトリーサイエンス
 松山 晃文 (先端医療振興財団 再生医療開発支援部)

10:10-10:40 **教育講演 造血システム 白血病幹細胞** 【第3会場 アネックス2】
 座長 岩間 厚志 (千葉大学)
白血病幹細胞
 平尾 敦 (金沢大学がん進展制御研究所 遺伝子・染色体構築研究分野)

10:40-11:10 **教育講演 造血システム 幹細胞ニッチ** 【第3会場 アネックス2】
 座長 藪田 精昭 (関西医科大学)
造血幹細胞ニッチ
 片山 義雄 (神戸大学附属病院 血液内科)

8:00-8:50 **Morning Discussion (Meet-the-Expert)** (要旨p.64) 【企画会場 5F・6F会議室】
 1. **再生医学研究の動向**
 平家 俊男 (京都大学 発生発達医学 (発達小児科学))
 2. **分子病態研究の醍醐味**
 下田 和哉 (宮崎大学 消化器血液学分野)
 3. **骨髄異形成症候群の形態診断**
 波多 智子 (長崎大学 分子治療研究分野 (原研内科))
 4. **魅力溢れる最新骨髄腫病学—如何に病歴を取り、巧みに診察し、新規画像診断を駆使し、詳細に診断し、きちんと診察するか?—**
—多臓器浸潤性疾患としての骨髄腫を理解しよう
 三輪 哲義 (国立国際医療研究センター病院 血液内科)
 5. **凝固線溶系データを読み解く**
 窓岩 清治 (自治医科大学 分子病態研究部/自治医科大学附属病院 血液内科)
 6. **国際化時代を生き抜くヘマトロジスト**
 木村 晋也 (佐賀大学 血液・呼吸器・腫瘍内科)

13:10-14:40	Plenary Session 座長 澤田 賢一 (秋田大学)・赤司 浩一 (九州大学) 1 Maintenance of the hematopoietic stem cell pool in bone marrow niches by EVI1-regulated GPR56 齋藤 祐介 (宮崎大学 腫瘍生化学分野) 2 NF- κ B-TNF- α positive feedback loop is essential for maintenance of myeloid leukemia stem cells 籠谷 勇紀 (東京大学 血液・腫瘍内科) 3 Pim-2 acts as a common downstream mediator to suppress bone formation in myeloma 日浅 雅博 (徳島大学 生体情報内科学分野) 4 Spectrum of genetic alterations in acquired aplastic anemia 吉里 哲一 (東京大学 がんゲノミクスプロジェクト) 5 Phase I/II study of RT-DeVIC for localized nasal NK/T-cell lymphoma(JCOG0211-DI): long-term follow-up 山口 素子 (三重大学 血液腫瘍内科学) 6 Different effect of HLA allele mismatch on the outcome of unrelated BMT between two time periods 神田 善伸 (自治医科大学さいたま医療センター 血液科)	【第1会場 メインホール】 発表言語：英語 E
-------------	--	----------------------------

14:45-16:55	JSH-ASH Joint Symposium (要旨p.36) 悪性リンパ腫に対する科学的治療戦略 Science-Based Medicine for Malignant Lymphoma 座長 Wyndham Wilson (National Cancer Institute, USA)・飛内 賢正 (国立がん研究センター中央病院) 1 Molecular pathogenesis of B-cell lymphoma Riccardo Dalla-Favera (Department of Microbiology and Immunology, Columbia University, USA) 2 Molecular characterization of T/NK cell malignancies 瀬戸 加大 (愛知県がんセンター研究所 遺伝子医療研究部) 3 Diffuse large B-cell lymphoma: Treatment decisions based on molecular features Wyndham Wilson (National Cancer Institute, USA) 4 Science-based management of adult T-cell leukemia-lymphoma 塚崎 邦弘 (長崎大学 血液内科学(原研内科))	【第1会場 メインホール】 発表言語：英語 E
-------------	--	----------------------------

14:45-16:55	シンポジウム 5 (要旨p.46) GVHD対策の最前線～非血縁者間末梢血幹細胞移植導入への対応～ Up-to-date Strategy Against Graft-versus-Host Disease in the Era of Unrelated Peripheral Blood Stem Cell Transplantation 座長 森 毅彦 (慶應義塾大学)・高見 昭良 (金沢大学) 1 基調講演 Peripheral blood stem cells versus bone marrow from unrelated donors: Results of blood and marrow transplant clinical trials network protocol 0201, a phase III, prospective, randomized trial Claudio Anasetti (Department of Blood and Marrow Transplantation, Moffitt Cancer Center, USA) 2 日本国内の骨髄移植と末梢血幹細胞移植の比較 長藤 宏司 (久留米大学 血液・腫瘍内科部門) 3 日本国内の非血縁者間末梢血幹細胞移植の現状 宮村 耕一 (名古屋第一赤十字病院 血液内科(造血細胞移植センター)) 4 日本の急性GVHD治療の現状 村田 誠 (名古屋大学附属病院 血液内科) 5 日本国内のATGを用いたGVHD予防の現状 藤 重夫 (国立がん研究センター中央病院 血液腫瘍科・造血幹細胞移植科) 福田 隆浩 (国立がん研究センター中央病院 血液腫瘍科・造血幹細胞移植科)	【第4会場 Room A】
-------------	---	---------------

14:45-16:55	一般口演	
17:00-18:30	ポスター討論	【ポスター展示会場 イベントホール】
12:10-13:00	コーポレートセミナー 14～24	

14:45-15:45	教育講演 骨髄不全症候群 座長 小島 勢二 (名古屋大学)・中尾 眞二 (金沢大学) BMF-1 再生不良性貧血とMDSの鑑別：小児科の立場から 濱 麻人 (名古屋大学 小児科) BMF-2 再生不良性貧血とMDSの鑑別：内科の立場から 通山 薫 (川崎医科大学 検査診断学(病態解析)) BMF-3 再生不良性貧血の重症度別治療方針 臼杵 憲祐 (NTT 東日本関東病院 血液内科)	【第2会場 アネックス1】
15:55-16:25	教育講演 骨髄不全症候群 MDS 座長 宮崎 泰司 (長崎大学) MDSのリスク別治療方針 市川 幹 (東京大学附属病院 血液・腫瘍内科)	【第2会場 アネックス1】
16:25-16:55	教育講演 骨髄不全症候群 PNH 座長 高月 清 (熊本大学/北野病院) PNHの病態と治療 中熊 秀喜 (和歌山県立医科大学 血液内科)	【第2会場 アネックス1】

14:45-15:15	教育講演 トピックス Imaging (要旨p.61) 座長 珠玖 洋 (三重大学) Bioimaging of stem cell functions in wound healing and tumor development Frank Marini (Wake Forest Institute for Regenerative Medicine, Wake Forest Comprehensive Cancer Center, USA)	【第3会場 アネックス2】 発表言語：英語 E
15:15-15:45	教育講演 トピックス Stem cell GT (要旨p.61) 座長 谷 憲三朗 (九州大学) Recent progress in hematopoietic stem cell gene therapy Fabio Candotti (Genetics and Molecular Biology Branch, NHGRI-NIH, USA)	【第3会場 アネックス2】 発表言語：英語 E
15:55-16:25	教育講演 トピックス iPS 座長 中畑 龍俊 (京都大学 iPS細胞研究所) 血液疾患とiPS細胞 黒川 峰夫 (東京大学 血液・腫瘍内科学)	【第3会場 アネックス2】
16:25-16:55	教育講演 造血システム 造血アッセイ 座長 安藤 潔 (東海大学) ヒト造血アッセイのための異種移植システムの進歩 竹中 克斗 (九州大学病院 第1内科)	【第3会場 アネックス2】

12:10-13:00	Meet-the-Professional (要旨p.63) 1 4P医療における倫理的、法的、社会的対応 浅野 茂隆 (早稲田大学 健康医療・先端科学融合研究機構/東京大学 名誉教授) 2 Toward the development of novel therapies for T- and NK-cell lymphomas 押味 和夫 (エーザイ株式会社/元・順天堂大学、東京女子医科大学 血液内科) 3 MDS診断への最も確実なアプローチ 朝長 万左男 (日本赤十字社 長崎原爆病院) 4 血友病インヒビターとITI (免疫寛容導入) 療法 吉岡 章 (奈良県立医科大学 学長)	【企画会場 5F・6F会議室】
-------------	--	-----------------

◆ 10月21日(日) 午前

9:00-11:10	<p>シンポジウム 6 (要旨p.47) 【第1会場 メインホール】 発表言語：英語 E</p> <p>多発性骨髄腫：新規治療法の開発に応用可能な基礎研究領域のトピックス Multiple Myeloma: Topics in Basic Science Applicable to the Development of Novel Therapies</p> <p>座長 木崎 昌弘 (埼玉医科大学総合医療センター)・飯田 真介 (名古屋市立大学)</p> <ol style="list-style-type: none"> Origin of the myeloma initiating cells and development of its targeting therapies 保仙 直毅 (大阪大学 癌ワクチン療法学) Intracellular targets of Immunomodulatory derivatives of thalidomide (IMiD®) Suzanne Lentzsch (Department of Medicine, Hematology-Oncology, Columbia University, USA) How to overcome the cell adhesion-mediated drug resistance in multiple myeloma 古川 雄祐 (自治医科大学分子病態治療研究センター 幹細胞制御研究部) Targeting the interplay between myeloma cells and the bone marrow microenvironment 安倍 正博 (徳島大学 生体情報内科学) Targeting myeloma cells and their microenvironment Kenneth C. Anderson (Jerome Lipper Myeloma Center, Dana-Farber Cancer Institute, Harvard Medical School, USA)
9:00-11:10	<p>Asian Joint Symposium (要旨p.40) 【第9会場 Room D】</p> <p>急性白血病：病態と新しい治療法の開発 Acute Leukemia: Pathophysiology and Development of Novel Treatments</p> <p>座長 Kaiyan Liu (Peking Uiniversity People's Hospital, China)・千葉 滋 (筑波大学)</p> <ol style="list-style-type: none"> Prognostic relevance of recurrent mutations in adult acute myeloid leukemia Chirayu Udomsakdi Auewarakul (Divison of Hematology, Faculty of Medicine Siriraj Hospital, Mahidol University, Thailand) A mouse model bearing "conventional" knock-in of <i>Npm1</i> mutation reveals myeloid expansion and implies a perturbation in hematopoietic microenvironment Wen-Chien Chou (National Taiwan University and Fu-Jen University, Taiwan) Targeting chemotherapy-resistant AML stem cells 石川 文彦 (理化学研究所 免疫・アレルギー科学総合研究センター ヒト疾患モデル研究グループ) Immunotherapy utilizing haploidentical HCT and subsequent donor NK cell infusion in refractory acute leukemia Kyoo-Hyung Lee (University of Ulsan, Asan Medical Center, Korea) Allogeneic hematopoietic stem cell transplantation in China: Where we are and where to go Xiao-jun Huang (Institute of Hematology, Peking University People's Hospital, China)
11:15-12:00	<p>JSH学会賞受賞講演 【第1会場 メインホール】</p> <p>座長 金倉 讓 (大阪大学)</p>
9:00-10:00	<p>ワークショップ 1 (要旨p.50) 【第4会場 Room A】</p> <p>高齢者白血病・悪性リンパ腫治療に対するアプローチ —どのような症例にどう対処するか—</p> <p>座長 大田 雅嗣 (福島県立医科大学)・青木 定夫 (新潟薬科大学)</p>
10:10-11:10	<p>ワークショップ 2 (要旨p.51) 【第4会場 Room A】</p> <p>血液疾患患者さんの不妊対策</p> <p>座長 谷本 光音 (岡山大学)・大谷 貴子 (全国骨髄バンク 前会長)</p>
9:00-11:10	<p>一般口演</p>

9:00-9:30	<p>教育講演 感染症 HBV (要旨p.59) 【第2会場 アネックス1】</p> <p>座長 畠 清彦 (がん研究会有明病院)</p> <p>がん薬物療法に伴う肝炎ウイルス再活性化と対策 田中 靖人 (名古屋市立大学 病態医科学)</p>
9:30-10:00	<p>教育講演 悪性リンパ腫 NHL-3 【第2会場 アネックス1】</p> <p>座長 三谷 絹子 (獨協医科大学)</p> <p>びまん性大細胞型Bリンパ腫の多様性と染色体・遺伝子異常 谷脇 雅史 (京都府立医科大学 血液・腫瘍内科学)</p>
10:10-10:40	<p>教育講演 悪性リンパ腫 NK/T 【第2会場 アネックス1】</p> <p>座長 張替 秀郎 (東北大学)</p> <p>NK/T細胞リンパ腫：病態と治療に関する研究の進展 山口 素子 (三重大学 血液腫瘍内科学)</p>
10:40-11:10	<p>教育講演 悪性リンパ腫 ATL 【第2会場 アネックス1】</p> <p>座長 上田 龍三 (愛知医科大学)</p> <p>ATLに対する新薬開発の現状 飛内 賢正 (国立がん研究センター中央病院 血液腫瘍科・造血幹細胞移植科)</p>
9:00-9:30	<p>教育講演 造血幹細胞移植 移植感染症 【第3会場 アネックス2】</p> <p>座長 岡本 真一郎 (慶應義塾大学)</p> <p>造血幹細胞移植における感染症のピットフォール 森 慎一郎 (聖路加国際病院 血液腫瘍内科)</p>
9:30-10:00	<p>教育講演 造血幹細胞移植 移植病理 (要旨p.58) 【第3会場 アネックス2】</p> <p>座長 今村 雅寛 (札幌北楡病院)</p> <p>造血幹細胞移植合併症の病理診断 大田 泰徳 (虎の門病院 病理部)</p>
10:10-10:40	<p>教育講演 造血システム 免疫系 【第3会場 アネックス2】</p> <p>座長 北村 俊雄 (東京大学)</p> <p>リンパ球の発生・分化システム 織谷 健司 (大阪大学 血液・腫瘍内科学)</p>
10:40-11:10	<p>教育講演 トピックス 好塩基球 (要旨p.60) 【第3会場 アネックス2】</p> <p>座長 溝口 秀昭 (東京女子医科大学)</p> <p>アレルギーならびに生体防御における好塩基球の新たな役割 ～日陰者が一気に檜舞台に～ 烏山 一 (東京医科歯科大学 免疫アレルギー学分野)</p>
8:00-8:50	<p>Morning Discussion (Meet-the-Expert) (要旨p.65) 【企画会場 5F・6F会議室】</p> <ol style="list-style-type: none"> よくわかるゲノム解析入門 稲澤 譲治 (東京医科歯科大学難治疾患研究所) 治療標的としての白血病幹細胞 平尾 敦 (金沢大学がん進展制御研究所 遺伝子・染色体構築研究分野) 血液疾患診療に必要な病理知識 中村 栄男 (名古屋大学病院 病理部) 造血幹細胞移植：急性および慢性GVHD対策 豊嶋 崇徳 (北海道大学 血液内科学) 先天性骨髄不全症候群を巡る最新の話 真部 淳 (聖路加国際病院 小児科) 血液分野における女性医師のキャリア形成 三谷 絹子 (獨協医科大学 内科学(血液))

◆ 10月21日(日) 午後

13:10-15:30 **パネルディスカッション** (要旨p.49) 【第1会場 メインホール】
血液学会造血器腫瘍ガイドライン作成とTake Home Message
座長 黒川 峰夫 (東京大学)・大西 一功 (浜松医科大学)
 1 **臨床試験のevidence level評価と診療ガイドラインの推奨grade**
 南谷 泰仁 (東京大学附属病院 血液腫瘍内科)
 2 **乳癌診療ガイドライン作成の実際と他領域への提言**
 中村 清吾 (昭和大学 乳腺外科学部門)
 3 **白血病診療ガイドライン作成のポイントとtake home message**
 薄井 紀子 (東京慈恵会医科大学附属第三病院 腫瘍・血液内科)
 4 **リンパ腫診療ガイドライン作成のポイントとtake home message**
 木下 朝博 (愛知県がんセンター中央病院 血液・細胞療法部)
 5 **骨髄腫診療ガイドライン作成のポイントとtake home message**
 村上 博和 (群馬大学 保健学科)
 6 **支持療法ガイドライン作成のポイントとtake home message**
 秋山 暢 (帝京大学 内科学)

13:10-15:20 **シンポジウム 7** (要旨p.48) 【第4会場 Room A】
CML/MDSの新たな展開
New Issues on the Pathophysiology and Treatment of CML/MDS
座長 松村 到 (近畿大学)・通山 薫 (川崎医科大学)
 1 **明らかになってきたMDSの分子病態**
 小川 誠司 (東京大学附属病院 がんゲノミクスプロジェクト)
 2 **小児領域のMDS/MPNの分子病態**
 小池 健一 (信州大学 小児医学)
 3 **IPSSの改定**
 宮崎 泰司 (長崎大学 血液内科学(原研内科))
 4 **CML幹細胞の性状と治療戦略**
 南 陽介 (名古屋大学 血液腫瘍内科学)
 5 **CML新規治療の試み: ABL TKIsと分子標的薬との併用**
 田内 哲三 (東京医科大学病院 血液内科)

13:10-15:20 **一般口演**

12:10-13:00 **コーポレートセミナー 25 ~ 35**

14:00-17:00 **公開シンポジウム** 【第9会場 Room D】
いのち・愛・かがやき 治療薬の進歩と問題点、ドラッグ・ラグや膨らむ治療費
総合司会 小川 公明 (NPO法人 白血病研究基金を育てる会)
第一部 膨らむ治療費
座長 橋本 明子 (特定非営利活動法人 血液情報広場・つばさ)
 1 **医療経済の視点**
 福田 敬 (国立保健医療科学院研究情報支援研究センター)
 2 **社会保険の視点**
 菊池 馨実 (早稲田大学法学部)
第二部 日本白血病研究基金受賞者(日本血液学会推薦)講演
座長 金倉 謙 (大阪大学 血液・腫瘍内科学)
 1 **次世代シーケンサーを用いた骨髄異形成症候群の新規標的遺伝子の探索**
 吉田 健一 (東京大学附属病院 がんゲノミクスプロジェクト)
 2 **中高年齢発症の結節硬化型ホジキンリンパ腫における臨床病理学的解析**
 浅野 直子 (名古屋大学附属病院 検査部)
第三部 治療薬の進歩と問題点、ドラッグ・ラグ
座長 黒川 峰夫 (東京大学 血液・腫瘍内科学)
 秋山 秀樹 (荏原病院 内科)

13:10-13:40 **教育講演 治療法 分子標的** 【第2会場 アネックス1】
座長 大屋敷 一馬 (東京医科大学)
分子標的治療の開発動向
 永井 正 (自治医科大学 内科学講座血液学部門)
 13:40-14:10 **教育講演 骨髄腫 MM-3** 【第2会場 アネックス1】
座長 鈴木 憲史 (日本赤十字社医療センター)
多発性骨髄腫に対する新規薬剤開発の動向
 黒田 純也 (京都府立医科大学 内科学血液・腫瘍内科部門)
 14:20-14:50 **教育講演 治療法 免疫療法** 【第2会場 アネックス1】
座長 杉山 治夫 (大阪大学)
造血器腫瘍に対する免疫療法
 安川 正貴 (愛媛大学 生体統御内科学(第1内科))
 14:50-15:20 **教育講演 トピックス 放射線被曝** 【第2会場 アネックス1】
座長 朝長 万左男 (日本赤十字社 長崎原爆病院)
低線量放射線被ばくの長期的影響
 明石 真言 (放射線医学総合研究所)

13:10-13:40 **教育講演 トピックス 免疫不全症** 【第3会場 アネックス2】
座長 伊藤 悦朗 (弘前大学)
免疫不全症の遺伝子診断・治療のup-to-date
 今井 耕輔 (東京医科歯科大学 小児・周産期地域医療学講座)
 13:40-14:10 **教育講演 トピックス EBV** (要旨p.60) 【第3会場 アネックス2】
座長 水谷 修紀 (東京医科歯科大学)
EBVと血液・腫瘍性疾患
 木村 宏 (名古屋大学 ウィルス学分野)
 14:20-14:50 **教育講演 輸血 TRALI** (要旨p.58) 【第3会場 アネックス2】
座長 室井 一男 (自治医科大学)
輸血関連急性肺障害 (TRALI)
 岡崎 仁 (日本赤十字社血液事業本部 中央血液研究所)
 14:50-15:20 **教育講演 感染症 感染症** 【第3会場 アネックス2】
座長 石田 陽治 (岩手医科大学)
血液疾患に合併する重症感染症
 吉田 稔 (帝京大学附属溝口病院 第4内科)

13:30-15:00 **Asian Symposium on Cord Blood Transplantation 2012** 【コーポレートセミナー会場 スワン】
 企画: 谷口 修一 (虎の門病院)
 岡本 真一郎 (慶應義塾大学)
 加藤 剛二 (名古屋第一赤十字病院)
 高梨 美乃子 (日本赤十字社関東甲信越ブロック血液センター)
 高橋 聡 (東京大学医科学研究所)
 発表言語: 英語 **E**
 主催: 協和発酵キリン株式会社
 後援: 日本造血細胞移植学会
 日本血液学会



要旨集



会長講演

10月19日(金) 13:10-13:45

発表言語：日本語

座長 高久 史磨 (日本医学会 会長/自治医科大学 名誉学長)



Toward the development of science-based medicine: トランスレーショナル・リサーチの推進

小澤 敬也

自治医科大学 内科学講座血液学部門

血液疾患については、ゲノム解析による分子病態の解明、その知見に基づく遺伝子診断と分子標的治療法の開発が著しく進展し、科学的な医療として大きな発展を遂げている。分子標的治療に続く近未来の先端治療として、遺伝子治療と細胞治療、及びこの両者を組み合わせた治療法の開発が期待されているが、この領域はアカデミアの活躍が特に必要とされる。本講演では、欧米の状況を概観すると共に、自治医大で取り組んでいるトランスレーショナル・リサーチの内容を簡単に紹介する。1) アデノ随伴ウイルス (AAV) ベクターを用いた遺伝子治療法：ここ数年、遺伝子治療の臨床的有効性が相次いで確認されており、遺伝子治療の再評価が始まっている。AAVベクターの利用では、静脈内投与でも肝臓に集積していく性質のある8型AAVベクターを用い、血友病Bに対する遺伝子治療の臨床開発が進んでいる。2) 間葉系幹細胞 (MSC) を用いた重症急性GVHDの治療：MSCは組織傷害や炎症のある部位に集積していく性質があり、また免疫抑制作用を有することから、ステロイド抵抗性の重症急性GVHDに対する新しい細胞治療法として期待されている。その他、MSCは腫瘍集積性を有しており、癌遺伝子治療のプラットフォームとしても興味深い。3) キメラ抗原受容体 (CAR: chimeric antigen receptor) 発現Tリンパ球による悪性リンパ腫の養子免疫遺伝子療法：CD19抗原を標的としたCAR発現Tリンパ球によるCLLや悪性リンパ腫に対する養子免疫遺伝子療法の臨床研究で有効性が報告されており、最近大きな脚光を浴びている。

本講演は、Presidential Symposiumのイントロダクションになるように、分かり易く解説する予定である。



Special Lecture

10月19日(金) 11:15–12:00

発表言語：英語 **E**

座長 小澤 敬也 (自治医科大学 内科学講座血液学部門)



Aplastic anemia, telomere attrition, and the new telomeropathies

Neal S. Young

Hematology Branch, NHBLI, NIH, Bethesda MD, USA

Telomeres are short in some patients with apparently acquired aplastic anemia, due to mutations in TERT, the gene encoding the reverse transcriptase, or TERC, the RNA template gene. Similar mutations also occur in patients with pulmonary fibrosis and hepatic cirrhosis. Accelerated telomere attrition is critical in human organ failure—the telomeropathies.

Critically short telomeres destabilize chromosomes and may predispose to early events in the development of cancer. Telomere measurements in the clinic should impact on diagnosis, prognosis, and treatment decisions. Improvement in telomere regeneration may be feasible pharmacologically. For example, sex hormones up-regulate telomerase expression, and androgens are being tested as therapy and for telomere modulation in affected patients.

特別講演

10月20日(土) 11:15–12:00

発表言語：日本語

座長 金倉 謙 (大阪大学大学院医学系研究科 血液・腫瘍内科学)



医学研究の要素とシステム：循環器研究の立場から

永井 良三

自治医科大学 学長

近年、多くの疾患が遺伝子や細胞内シグナルの異常によることが明らかになり、メカニズムに基づいた診断や治療法が開発されるようになった。一方、心臓血管病をはじめとする慢性疾患に対する治療はイベントの発生を抑制することが重要である。イベントは低い頻度で発生するため膨大な数の症例を対象とするレジストリー研究や介入を伴う臨床試験を欠かさない。メカニズム研究が必然性を追求するのに対し、イベント抑制をめざす研究は偶然性を制御する研究である。講演では自らの研究をもとに、医学研究のあり方について考えを述べたい。

ASH Special Lecture

10月20日(土) 11:15–12:00

発表言語：英語 **E**

座長 須田 年生 (慶應義塾大学医学部 発生・分化生物学)



Therapy with mesenchymal stromal cells: Evolving concepts of action

Armand Keating

Department of Cell Therapy, Princess Margaret Hospital / The University of Toronto, Canada

Mesenchymal stromal cells (MSCs) are the subject of intensive research activity. They hold promise in addressing many unmet medical needs by regenerating injured tissue. Impetus for the myriad clinical studies now underway was based on the notion that MSCs were stem cells able to replace defective progenitors of many cell lineages. Subsequent evidence suggested that MSCs act by elaborating paracrine factors that mediate tissue regeneration. More recent work however, indicates that the effects of MSCs may also be due to their anti-inflammatory properties. These evolving concepts of MSC action will be discussed in the context of the need to design clinical trials that can most appropriately test the efficacy of this intriguing cell population.

EHA Special Lecture

10月19日(金) 11:15–12:00

発表言語：英語 **E**

座長 直江 知樹 (名古屋大学大学院医学系研究科 血液・腫瘍内科学)



Maintenance therapy in lymphoma

Ulrich Jäger

Department of Medicine I, Medical University of Vienna (MUW), Austria

Lymphoma treatment in the antibody era is able to achieve high response rates. In order to maintain clinical remission prolonged treatment with non-toxic drugs represents an accepted option particularly in indolent lymphoma. Anti-CD20 antibody maintenance is standard of care after first and second line therapy and improves progression-free survival. In aggressive lymphoma maintenance treatment with rituximab is still under investigation. Clinical trials with other drugs (e.g. lenalidomide) are underway. The current treatment options and future perspectives will be discussed in this presentation.

血液疾患に対する革新的遺伝子／細胞療法 Innovative Gene & Cell Therapy for Hematological Diseases

座長 小澤 敬也 (自治医科大学 内科学講座血液学部門)
Renier J. Brentjens (Department of Medicine, Leukemia Service, Memorial Sloan Kettering Cancer Center, USA)



企画：小澤 敬也 (第74回日本血液学会学術集会 会長／自治医科大学 内科学講座血液学部門)

概要紹介

会長シンポジウムでは、血液疾患に対する先端治療の開発研究で最近脚光を浴びているテーマを取り上げ、内外の代表的研究者に講演をお願いした。Engineered T cell therapyでは、キメラ抗原受容体 (CAR) をTリンパ球に発現させ、腫瘍ターゲティング効率を高める方法が注目される。CD19抗原を標的とした養子免疫遺伝子療法について、Brentjens博士に御講演いただく。血友病Bについては、8型アデノ随伴ウイルス (AAV) ベクターを用いた遺伝子治療で漸く臨床的有効性が得られるようになっており、この分野のパイオニアであるHigh博士に御講演いただく。最近では、ゲノム塩基配列自体の操作も技術的に可能になっており、その臨床応用も始まっている。その基礎と応用についてGregory博士に御講演いただく。JSH演者としては、花園博士に、iPS細胞の臨床応用に向けた研究の進捗状況について御講演いただく。

JSHの若手の皆さんがこの分野に関心を持ち、積極的に研究に参加されることを期待したい。



Chimeric antigen receptor (CAR) modified T cells as a novel approach to cancer immunotherapy: Initial promising clinical responses and future directions

Renier J. Brentjens

Department of Medicine, Leukemia Service, Memorial Sloan Kettering Cancer Center, USA

Recently published reports support the novel approach of treating cancer with patient derived T cells genetically modified to express artificial T cell receptors, termed chimeric antigen receptors (CARs), targeted to tumor associated antigens. To this end, initial clinical trial outcomes of patients with B cell malignancies treated with autologous T cells genetically modified to express a CAR specific to the B cell CD19 antigen, demonstrate this approach to be a promising therapeutic intervention which will potentially dramatically alter the standard of care in these malignancies. However, the currently published clinical trial data regarding CD19 targeted T cells present a multitude of variables which may markedly influence the clinical trial outcomes and influence the optimal design of future clinical trials. Furthermore, promising additional T cell genetic modifications based on pre-clinical studies to enhance the efficacy of this CAR modified T cell therapy in future clinical trials will be discussed.



Gene therapy for hemophilia

Katherine A. High

Perelman School of Medicine at the University of Pennsylvania / Howard Hughes Medical Institute / The Children's Hospital of Philadelphia, USA

The goal of gene therapy, one of the most compelling concepts in modern medicine, is to effect cure of a disease by long-term expression of a donated gene at therapeutically relevant levels. This goal has now been realized for hemophilia B, through the use of an adeno-associated viral vector delivered to the liver in men with severe hemophilia B. This presentation will describe the development of a successful gene therapy approach to the human disease, following cure of hemophilia in murine and canine models. Challenges to broader application of this approach will also be discussed.



Genome editing with engineered zinc finger nucleases

Philip D. Gregory

Sangamo BioSciences Inc, USA

Genome editing using zinc finger nucleases (ZFNs) holds tremendous promise as a novel therapeutic modality. This presentation will describe; (i) the systemic administration of ZFNs for *in vivo* gene correction of hemophilia B in mice; (ii) generation of "universal" CD8 T-cells devoid of endogenous TCR $\alpha\beta$ expression for cancer immunotherapy, and (iii) recent data from on-going clinical trials of autologous CCR5-disrupted CD4 T cells for the treatment of HIV.



iPS cell research using large animals 大型動物を用いた遺伝子・細胞治療研究

花園 豊

自治医科大学分子病態治療研究センター 再生医学研究部

遺伝子・細胞治療において有効性と安全性の担保が常に必要とされるが、それにはマウスのような小型動物を用いた評価系は必要だが必ずしも十分ではないと考えている。遺伝子・細胞治療の有効性や安全性について、我々がサルやヒツジを用いて検証した例を紹介したい。また、ヒトとマウスのiPS細胞では、その状態が大きく異なることがわかってきた。他の動物のiPS細胞はどうか？ 大型動物を用いたiPS細胞研究にも触れたい。

悪性リンパ腫に対する科学的治療戦略 Science-Based Medicine for Malignant Lymphoma

座長 **Wyndham Wilson** (National Cancer Institute, USA)
飛内 賢正 (独立行政法人 国立がん研究センター中央病院 血液腫瘍科・造血幹細胞移植科)



企画：飛内 賢正 (リンパ系腫瘍：ALL、悪性リンパ腫 領域別委員長)
独立行政法人 国立がん研究センター中央病院 血液腫瘍科・造血幹細胞移植科

概要紹介

本シンポジウムはASHとJSHのjoint symposiumとして開催し、悪性リンパ腫に関する基礎と臨床に関する重要課題を取り上げ、最新の研究成果に関する情報交換を行う。ASH側からはコロンビア大学のDr. Riccardo Dalla-Faveraと米国立癌研究所(NCI)のDr. Wyndham Wilsonが講演し、JSH側からは瀬戸加大先生(愛知県がんセンター研究所)と塚崎先生(長崎大学)が講演を行う。B細胞リンパ腫腫瘍化の分子機序、T/NK細胞リンパ腫の生物学、びまん性大細胞型B細胞リンパ腫の治療、ATLの治療などの重要課題を論じる。積極的に討論に参加していただければ幸いです。



Molecular pathogenesis of B-cell lymphoma

Riccardo Dalla-Favera

Department of Microbiology and Immunology, Columbia University, USA

Diffuse Large B-Cell Lymphoma (DLBCL) is associated with a multiple genetic lesions whose identification and functional characterization is required for a complete understanding of its pathogenesis and for the development of targeted therapeutic approaches. Toward this end, we have integrated whole-exome sequencing analysis and copy number variation analysis for a comprehensive definition of the DLBCL coding genome. The results have identified a novel set of recurrent genetic lesions, which, in turn, identify novel altered pathways, including those involving chromatin remodeling and immune escape.



Molecular characterization of T/NK cell malignancies

瀬戸 加大

愛知県がんセンター研究所 遺伝子医療研究部

T細胞腫瘍の内、成人T細胞性白血病/リンパ腫(ATLL)のリンパ腫型と末梢性T細胞性リンパ腫分類不能型(PTCL, NOS)のゲノム異常を有する群にはゲノム異常様式、臨床病態、病理組織学的に極めて類似していることを報告してきた。より詳細に検討したところATLL検体、PTCL, NOS検体ともに約70%の症例で、リンパ節内でクローンの進展が起こっていることを明らかにした。また、NK細胞性腫瘍については、最も高頻度に欠失の認められる6q21領域から標的遺伝子FOXO3とPRDM1を見いだした。ともに癌抑制遺伝子としての機能を有するが、FOXO3はNK細胞性腫瘍に特異的な抑制効果を示した。



Diffuse large B-cell lymphoma: Treatment decisions based on molecular features

Wyndham Wilson

National Cancer Institute, USA

Dr. Wyndham Wilson will be discussing new advances in the treatment of diffuse large B-cell lymphomas. Important insights have now shown that this lymphoma is actually multiple diseases with unique mechanisms of lymphomagenesis and molecular targets. In the following presentation, Dr. Wilson will discuss the molecular biology of the different subtypes of DLBCL and how that has and will change treatment.



Science-based management of adult T-cell leukemia-lymphoma

塚崎 邦弘

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科附属原爆後障害医療研究施設 原爆・ヒパクシャ医療部門
血液内科学(原研内科)

臨床病態が多様なATLは、分子病態ではHTLV-1の組み込み部位はランダムかつ発現は限定的であり、多彩な宿主ゲノム異常を有するので、ウイルスを標的とした治療は困難とされてきた。Watchful waitingから強力な化学療法・同種造血幹細胞移植まで治療法は幅広く、再発例には抗CCR4抗体も適用される。欧米ではインターフェロン/ジドブジン療法が用いられている。病態で層別化されているATL治療のより適切なアルゴリズムの開発には、臨床病型の細分化を含む最適化と、幅広くある標準治療のそれぞれの効果予測因子の同定が基盤となる。さらにATL細胞増殖に重要なmiR-31、HTLV-1のHBZなどの標的療法は、治療法のみならずATL発症高リスクのHTLV-1キャリアに対する予防法として期待される。

骨髄不全症候群の病態

Pathophysiology of Bone Marrow Failure Syndromes

座長 中熊 秀喜 (和歌山県立医科大学 血液内科)

Mario Cazzola (Department of Hematology Oncology, Fondazione IRCCS Policlinico San Matteo, and Department of Molecular Medicine, University of Pavia, Italy)

企画：中尾 眞二 (赤血球系疾患 領域別委員長)

金沢大学大学院医学系研究科 細胞移植学

概要紹介

骨髄不全における最近のトピックスの一つに、クローン性造血と病態・治療反応性との関係がある。本シンポジウムでは、再生不良性貧血におけるクローン性造血の意義(金沢大学、中尾)、小児骨髄不全における形態異常と病態との関係(名古屋大学、小島)、最近同定されたRNAスプライシング異常と骨髄異形成症候群病態との関係(Pavia大学、Cazzola)、発作性夜間血色素尿症に対するエクソーム療法との関係と問題点(St James's大学、Hillmen)、の四つのテーマにスポットを当て、それぞれにおける最新の話題が紹介される予定である。



Preferential activation of hematopoietic stem cells with genetic alterations in patients with acquired aplastic anemia

中尾 眞二

金沢大学大学院医学系研究科 細胞移植学

再生不良性貧血(再不貧)は、免疫学的機序によって発症する良性の骨髄不全であるが、実際には、*PIG-A*変異、6番染色体短腕のuniparental disomy (6pUPD)、13q-などの様々な異常造血幹細胞クローンによって造血が支持されている。最近のエクソームシーケンシングによって、造血を負に調節するリガンドの遺伝子変異も検出された。これらの変異クローンは、何らかの造血抑制因子やCTLに対する感受性低下のため、優先的に活性化され、造血に寄与するようになったと考えられる。変異クローンの同定は、再不貧における造血抑制メカニズムを明らかにする上でカギを握っている。



The molecular basis of myelodysplastic syndromes and its clinical relevance

Mario Cazzola

Department of Hematology Oncology, Fondazione IRCCS Policlinico San Matteo, and Department of Molecular Medicine, University of Pavia, Italy

Myelodysplastic syndromes (MDS) are myeloid neoplasms characterized by dysplasia in one or more cell lines, ineffective hematopoiesis, and variable risk of progression to acute myeloid leukemia (AML). The World Health Organization (WHO) classification criteria define different conditions that are heterogeneous in terms of life expectancy. In addition, risk-based stratification systems have been developed to improve prognostication of MDS, including the International Prognostic Scoring System (IPSS) and the WHO classification-based Prognostic Scoring System (WPSS). In the last few years, important steps have been made in developing novel molecular tools for diagnosis and prognostic evaluation of MDS. Somatic mutations of *TET2* represent a useful marker of clonal proliferation. Additional mutant genes, including *TP53*, *EZH2*, *ETV6*, *RUNX1*, and *ASXL1*, have been shown to be independently associated with decreased overall survival. More recently, somatic mutations in genes encoding core components of the RNA splicing machinery, including *SF3B1*, *SRSF2* and *U2AF1*, have been detected in MDS patients and shown to be associated with disease phenotype and clinical outcome.



小児再生不良性貧血と低悪性度骨髄異形成症候群

Similarities and differences between hypoplastic refractory cytopenia and aplastic anemia in children

小島 勢二

名古屋大学大学院医学系研究科 発育・加齢医学(小児科学)

小児における低悪性度骨髄異形成症候群(MDS)の特徴として骨髄は低形成である場合が多く、再生不良性貧血や先天性骨髄不全症候群との鑑別は容易ではない。2008年に改訂されたWHO分類では、小児MDSを独立した章で取り扱い、refractory cytopenia of childhood(RCC)が新たな疾患単位として“暫定的”に取り入れられた。RCCはわが国では、従来、再生不良性貧血の範疇に入れられていたと考えられ、今回のシンポジウムでは、その生物学的、および臨床上的意味づけについて報告する。



The pathophysiology of PNH: Lessons from targeted therapy

Peter Hillmen

Department of Haematology, St. James's Institute of Oncology, UK

The recent advances in the understanding of the pathophysiology of PNH including its association with aplastic anaemia and other bone marrow failure states will be presented. We will also discuss the key role of intravascular haemolysis and absorption of nitric oxide in the symptoms and complications of PNH. The latest clinical data on the management of PNH with eculizumab will be presented including the selection of patients for therapy and how to maximize the benefits of eculizumab in individual patients. In addition the impact of eculizumab on changing the natural history of PNH will be discussed.

急性白血病：病態と新しい治療法の開発

Acute Leukemia: Pathophysiology and Development of Novel Treatments

座長 Kaiyan Liu (Peking University People's Hospital, China)

千葉 滋 (筑波大学 医学医療系血液内科)

企画：小澤 敬也 (第74回日本血液学会学術集会 会長/自治医科大学 内科学講座血液学部門)

概要紹介

JSH学術集会では国際連携を推進してきており、今回は、アジアにおける各血液学会との連携にも力を入れ、昨年のAsian Workshopをベースに、ジョイント・シンポジウムを企画した。タイ血液学会、台湾血液学会、日本血液学会、韓国血液学会、中国血液学会(発表順)と全体テーマを調整した上で演者を推薦していただいた。急性白血病に関する基礎研究から臨床まで、大変興味深い演題が並んでいる。アジアにおける医学研究の発展には目を見張るものがあり、多くの皆さんが本シンポジウムに参加されることを期待したい。



Prognostic relevance of recurrent mutations in adult acute myeloid leukemia

Chirayu Udomsakdi Auewarakul

Division of Hematology, Faculty of Medicine Siriraj Hospital, Mahidol University, Thailand

Various chromosomal aberrations have been described in 50-60 % of AML patients; some of them are associated with distinct clinical features and prognostic relevance. Notably among normal chromosome cases are different classes of gene mutations that potentially affect cell survival, proliferation, and/or differentiation. Examples of favorable mutations include *NPM1* and *CEBPA* while unfavorable mutations are *FLT3*, *WT1*, *MLL*, and *DNMT3*. Advanced technologies such as gene expression profiling and whole genome sequencing are useful tools to detect novel and clinically relevant mutations and provide more insights into AML pathogenesis.



A mouse model bearing "conventional" knock-in of *Npm1* mutation reveals myeloid expansion and implies a perturbation in hematopoietic microenvironment

Wen-Chien Chou

National Taiwan University and Fu-Jen University, Taiwan

Nucleophosmin (*NPM1*) is a ubiquitous and multifunctional phosphoprotein. Somatic *NPM1* mutations frequently occur in acute myeloid leukemia (AML). The pathogenesis of mutant *NPM1* has been explored by transgenic or "humanized" knock-in mouse models. Here, we demonstrate the first "conventional" knock-in mouse model of *Npm1* mutation by inserting TCTG after nucleotide c.857 (c.854-857dupTCTG), which mimics human *NPM1* mutation without any "humanized" sequence. The resultant mutation sequence is slightly different from human mutation but appears to exhibit cytoplasmic pulling force. We found the homozygous mutant (*Npm1^{c+/c+}*) mice were embryonic lethal before E8.5 day, while heterozygote (*Npm1^{wt/c+}*) mice were born with Mendelian ratio and fertile. About half of *Npm1^{wt/c+}* mice developed myeloproliferative neoplasms with extramedullary hematopoiesis. Aged mutant mice had declined colony-forming ability and poor cobblestone colony formation, suggesting a perturbation of hematopoietic niche. Microarray experiments and gene set enrichment analysis on mice myeloid precursor cells and 227 human samples revealed significant enrichment of CXCR4/CXCL12-related genes in wild-type than mutant cells from both mouse and human cells. In summary, our mouse model demonstrated *Npm1* mutation alone is not sufficient for leukemogenesis. Perturbation of hematopoietic niche in mutant HSC implied by underrepresentation of CXCR4/CXCL12-related genes may be important in pathogenesis of *NPM1* mutations.

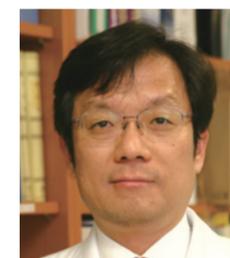


化学療法抵抗性AML細胞に対するあらたな治療戦略 Targeting chemotherapy-resistant AML stem cells

石川 文彦

理化学研究所 免疫・アレルギー科学総合研究センター ヒト疾患モデル研究グループ

急性骨髄性白血病は、完全寛解を得ながらも、再発を来す症例が少なくない。私たちは、急性骨髄性白血病の病態理解と白血病幹細胞の動態理解を目的として、患者白血病状態をマウスに再現する xenograft モデルの開発を行ってきた。この xenograft モデルを用いることで、白血病幹細胞の、再発における役割・骨髄における局在・抗がん剤抵抗性のメカニズムを解析した。これらの解析結果に基づいて、急性骨髄性白血病の幹細胞を標的とした治療の可能性を議論するとともに、治療開発に向けた取り組みを紹介したい。



Immunotherapy utilizing haploidentical HCT and subsequent donor NK cell infusion in refractory acute leukemia

Kyoo-Hyung Lee

University of Ulsan, Asan Medical Center, Korea

Donor NK cell infusion (DNKI) after haploidentical HCT has been shown to decrease leukemia recurrence in a murine model. We have shown previously that DNKI up to 2.5×10^7 cells/kg after haploidentical HCT did not cause obvious increase in GVHD. We then examined the clinical effects of higher doses of DNKI given 2-3 weeks after haploidentical HCT in 40 patients with hematologic malignancies, mostly acute leukemia. Our preliminary data showed that DNKI with a median total 2×10^8 cells/kg was tolerated well without increase in GVHD or TRM. Further, DNKI after haploidentical HCT may decrease leukemia progression especially in refractory AML.



Allogeneic hematopoietic stem cell transplantation in China: Where we are and where to go

Xiao-jun Huang

Institute of Hematology, Peking University People's Hospital, China

China has made substantial progress in the field of allo-HSCT during the past three decades, particularly in the clinical applications and mechanism researches of haplo-HSCT system, strategies to overcome relapse and GVHD, and modified HSCT for elderly patients. With the development of multi-center clinical trials and advances in translational research, these unique fields of allo-HSCT in China will have a promising future and contribute more to the world HSCT system.

シンポジウム 1

10月19日(金) 9:00-11:10

発表言語：英語 **E**

免疫性血小板減少性紫斑病 (ITP) 研究の最前線 The Research Front Line of Immune Thrombocytopenia

座長 **大森 司** (自治医科大学 分子病態治療研究センター 分子病態研究部)
矢富 裕 (東京大学大学院医学系研究科 病態診断医学 (臨床病態検査医学))



企画：矢富 裕 (血栓/止血/血管 領域別委員長)
東京大学大学院医学系研究科 病態診断医学 (臨床病態検査医学)

概要紹介

特発性血小板減少性紫斑病 (idiopathic thrombocytopenic purpura ; ITP) の「特発性 (idiopathic)」は、元来、原因がわからないという意味であったが、現在では自己免疫が原因とされており、「免疫性 (immune)」と理解されるようになった。近年、本症に関しては病態解明が進み、診断・治療両面において、急速な進歩が認められた。診断面では、血小板キネティックスを反映する有用な指標が登場し、治療面でも、トロンボポエチン受容体作動薬、リツキシマブなどが難治性ITPの治療方針を変えようとしている。本シンポジウムでは、このITP研究・診療の最先端を紹介するとともに、免疫学的機序で血小板減少を呈する自己免疫性リンパ球増殖症 (ALPS)・RAS-associated ALPS-like disease、さらには、抗リン脂質抗体症候群などの関連の話題も提供させていただく。海外からの演者も含め、第一線の研究者にご発表いただくことになっており、免疫性血小板減少症に対する最新の理解を深めていただくことができると信じている。

- 1 ITPの病態と診断**
Pathophysiology and diagnosis of primary immune thrombocytopenia
富山 佳昭 (大阪大学医学部附属病院)
- 2 ITP治療の我が国における現状**
Current management of immune thrombocytopenia in Japan
宮川 義隆 (慶應義塾大学医学部 内科学 (血液))
- 3 Thrombopoietin mimetics for the treatment of ITP**
David J. Kuter (Department of Hematology, Harvard Medical School, USA)
- 4 免疫異常症に関連した慢性血小板減少症**
Chronic immune thrombocytopenia as a disease with or without association of defined diseases in children
高木 正稔 (東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科 生体応答学 発生発達病態学)
- 5 Thrombocytopenia in the antiphospholipid syndrome**
Ricard Cervera (Department of Autoimmune Diseases, Hospital Clinic, Spain)

シンポジウム 2

10月19日(金) 9:00-11:10

発表言語：英語 **E**

エピゲノム制御と造血・癌 Epigenomics of Hematopoiesis and Cancer

共催：JCA (日本癌学会)

座長 **仲野 徹** (大阪大学大学院医学系研究科 病理学 (幹細胞病理学))
牛島 俊和 (独立行政法人 国立がん研究センター研究所 エピゲノム解析分野)



企画：岩間 厚志 (造血システム (正常/異常造血の基礎研究) /造血幹細胞 領域別委員長)
千葉大学大学院医学研究院 細胞分子医学

概要紹介

エピジェネティクスとは、ゲノムに書かれた遺伝子情報を変更することなく遺伝子発現を制御する現象の総称である。エピジェネティックな遺伝子発現制御においては、DNAのメチル化やヒストン修飾などのゲノムの後天的修飾 (エピゲノムと呼ぶ) と、クロマチンリモデリング因子、各種RNAなどが協調して機能する。幹細胞におけるエピジェネティック制御機構の解明が進む中、癌の発症メカニズムとして、エピジェネティック機構の破綻が重要な意義を有することが認識されつつある。近年の網羅的なゲノム遺伝子配列解析においてエピジェネティック制御遺伝子の変異が次々と見いだされた事実がこの流れを決定づけた。本シンポジウムにおいては、DNAメチル化やヒストン修飾異常に代表されるエピジェネティック機構の破綻が、どのように造血異常や癌の発症・進展につながるのかについて、造血から造血器腫瘍、固形腫瘍へと幅広い観点から俯瞰するとともに、エピジェネティック治療の可能性についても議論したい。本シンポジウムは日本癌学会との合同シンポジウムであり、日本癌学会から2名の演者をお呼びしている。

- 1 癌抑制遺伝子としてのポリコム群遺伝子の機能**
Role of the polycomb group proteins in the restriction of tumor development
岩間 厚志 (千葉大学大学院医学研究院 細胞分子医学)
- 2 H3K27 methylation regulators and their roles in acute leukemia**
Iannis Aifantis (Department of Pathology, NYU School of Medicine, Howard Hughes Medical Institute, USA)
- 3 ヒストンアセチル化制御と造血幹細胞・白血病**
Regulation of histone modifications in hematopoietic and leukemic stem cells
北林 一生 (独立行政法人 国立がん研究センター研究所 分子標的研究グループ)
- 4 DNAメチル化異常の起源と診断への応用**
Aberrant DNA methylation - Its origin and diagnostic applications
牛島 俊和 (独立行政法人 国立がん研究センター研究所 エピゲノム解析分野)
- 5 Cancer epigenetics: New drugs and paradigms**
Frank Lyko (Division of Epigenetics, German Cancer Research Center, Germany)

シンポジウム 3

10月19日(金) 13:50-16:00

発表言語：英語 **E**

骨髄系腫瘍-新規分子標的治療の展望

Myeloid Malignancies in a New Era of Molecularly Targeted Therapy

共催：JSMO (日本臨床腫瘍学会)

座長 清井 仁 (名古屋大学大学院医学系研究科 血液・腫瘍内科学)
田村 和夫 (福岡大学医学部 腫瘍・血液・感染症内科学)



企画：大西 一功 (骨髄系腫瘍：AML 領域別委員長)
浜松医科大学医学部附属病院 腫瘍センター

概要紹介

本シンポジウムは臨床腫瘍学会とのジョイント・シンポジウムとして開催される。血液腫瘍領域では多くの分子標的薬が臨床応用され著効を示す病型がある一方で、AMLに対する分子標的薬はゲムツズマブ・オゾガマイシン以降新規のものは認められていない。

そこで、本シンポジウムでは、固形腫瘍領域で進行している分子標的薬も含めて今後AML治療にも適応が有望視される分子標的薬、さらに癌幹細胞を標的とした研究を中心に構成した。臨床腫瘍学会側からは消化器領域の癌幹細胞研究と分子標的治療、およびシグナル伝達を標的とした新しい分子標的治療について、日血側からは、エピゲノム制御を標的とした研究をご講演いただく。

海外演者としては、CALGBのMarcucci先生から遺伝子異常に基づくリスクによるAMLの層別化治療について、またMD Anderson Cancer Centerからは多くのAML/MDSに対する分子標的薬の開発に関っているRavandi先生から新規分子標的薬の開発状況を中心に講演いただき、今後のAML治療の展開について考察する。

1 幹細胞を標的とした研究と分子標的治療 Cancer stem cell research for innovative cell-modifying technologies

石井 秀始 (大阪大学大学院 消化器癌先進科学療法開発学 寄附講座)

2 造血器腫瘍におけるDNAヒドロキシメチル化 DNA hydroxymethylation in hematologic malignancies

坂田 (柳元) 麻実子 (筑波大学 血液内科)

3 耐性シグナルを標的とした新たな分子標的治療 Novel molecularly targeted therapy targeting resistant signals

矢野 聖二 (金沢大学附属病院 がん高度先進治療センター)

4 Prognostic, predictive and therapeutic role of microRNAs in AML

Guido Marcucci (Division of Hematology, The Ohio State University Medical Center, Comprehensive Cancer Center, USA)

5 Role of molecular diagnostics and MRD to guide therapy in AML

Farhad Ravandi-Kashani (Department of Leukemia, University of Texas-MD Anderson Cancer Center, USA)

シンポジウム 4

10月20日(土) 9:00-11:10

発表言語：英語 **E**

間葉系幹細胞：造血幹細胞移植への臨床応用に向けた進歩

Mesenchymal Stem Cells: Progress Toward Clinical Application for Hematopoietic Stem Cell Transplantation

座長 前川 平 (京都大学医学部附属病院 輸血細胞治療部)
森尾 友宏 (東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 発生発達病態学)



企画：前川 平 (免疫/細胞/遺伝子治療 領域別委員長)
京都大学医学部附属病院 輸血細胞治療部

概要紹介

本シンポジウムでは基礎研究と臨床研究の両面にわたり著しい進展をみせる間葉系幹細胞 (Mesenchymal Stem Cell: MSC) を取り上げる。米国NIHの提供するClinicaltrials.govをみると、現在約50の疾患等に対し約200もの臨床試験が登録されている。血液疾患においてMSCの臨床応用が最も期待されるものは造血細胞移植後の急性GVHDであろう。細胞医薬品としての開発を目指してMSCの日本での臨床試験に関わられる立花克彦先生、この領域の第一人者であるLe Blanc先生に急性GVHDに対するMSC治療の実際と今後について議論して頂く。MSCは組織再生能、造血調整能など多彩な生物学的特性を有しており、今後様々な病態において新しい概念による治療ツールとなっていくであろう。三浦康生先生には血液疾患におけるMSCの関与やMSCを利用した造血細胞の増幅、Horwitz先生には遺伝性骨疾患に対する同種造血細胞移植などMSCの組織再生能力を利用した治療などについて議論頂き、MSCの臨床応用への今後の可能性について考えていきたい。最後に梅澤明弘先生にはMSCの臨床応用に不可欠な安全で高品質な細胞供給や倫理指針などについての日本での現状と今後について議論して頂く。

1 我が国における、ステロイド抵抗性急性GVHDを対象疾患としたMSCの臨床開発 Clinical development of MSC for the treatment of steroid refractory acute GVHD in Japan

立花 克彦 (日本ケミカルリサーチ株式会社 開発本部)

2 Mesenchymal stem cells for treatment of Graft-Versus-Host Disease

Katarina Le Blanc (Laboratory Medicine, Herm, Karolinska Institutet, Sweden)

3 間葉系幹細胞による造血制御 Regulation of hematopoiesis by mesenchymal stem cells

三浦 康生 (京都大学医学部附属病院 輸血細胞治療部)

4 Mesenchymal stem cells expand the spectrum of cell therapy

Edwin M. Horwitz (Division of Oncology/Blood and Marrow Transplantation The Children's Hospital of Philadelphia, The University of Pennsylvania Perelman School of Medicine, USA)

5 MSC製剤調整に関する基礎研究と臨床開発に向けて Mesenchymal stem cell-based therapy -bench to bed-

梅澤 明弘 (独立行政法人 国立成育医療研究センター 再生医療センター)

シンポジウム 5

10月20日(土) 14:45-16:55

発表言語：日本語

GVHD 対策の最前線～非血縁者間末梢血幹細胞移植導入への対応～ Up-to-date Strategy Against Graft-versus-Host Disease in the Era of Unrelated Peripheral Blood Stem Cell Transplantation

座長 森 毅彦 (慶應義塾大学医学部 血液内科)
高見 昭良 (金沢大学附属病院 輸血部)



企画：神田 善伸 (造血幹細胞移植 領域別委員長)
自治医科大学附属さいたま医療センター 血液科

概要紹介

日本国内でも2010年10月から非血縁者間末梢血幹細胞移植 (PBSCT) が導入された。国内の血液内科医にとって未体験に近い非血縁者間PBSCTを安全に普及させるためには移植片宿主病 (GVHD) 対策の至適化が欠かせない。そこで、第74回日本血液学会学術集会の造血幹細胞移植領域のシンポジウムは「GVHD対策の最前線～非血縁者間末梢血幹細胞移植導入への対応～」をテーマにあげた。最初に基調講演としてAnasetti先生に米国で行われた非血縁者間骨髄移植 (BMT) と非血縁者間PBSCTの無作為割付比較試験についてご紹介いただく。両群を同じGVHD予防法で行った比較試験の結果は、今後PBSCT群でどのようにGVHD予防法を調整していくべきかについてのヒントとなる。続いて国内の現状を把握するために、長藤先生には本邦の血縁者間BMTとPBSCTの後方視的比較研究の結果を、宮村先生には国内の非血縁者間PBSCTの現状についてご紹介いただく。そして最後に非血縁者間PBSCTにおけるGVHD対策を具体的に考えていくために、村田先生には日本造血細胞移植学会GVHDワーキンググループにおける国内のGVHD治療の解析結果について、福田先生には今後使用頻度が増加すると予測される抗ヒト胸腺細胞を用いたGVHD予防の現状についてご紹介いただく。本シンポジウムによって非血縁者間PBSCTにおける至適なGVHD対策をすぐに決定できるというものではないが、今後の試行錯誤の過程を改善することによってラーニングカーブの上昇に要する時間を短縮できることを期待している。

- 1 **基調講演** Peripheral blood stem cells versus bone marrow from unrelated donors: Results of blood and marrow transplant clinical trials network protocol 0201, a phase III, prospective, randomized trial
Claudio Anasetti (Department of Blood and Marrow Transplantation, Moffitt Cancer Center, USA)
- 2 **日本国内の骨髄移植と末梢血幹細胞移植の比較**
長藤 宏司 (久留米大学医学部内科学講座 血液・腫瘍内科部門)
- 3 **日本国内の非血縁者間末梢血幹細胞移植の現状**
宮村 耕一 (名古屋第一赤十字病院 血液内科 (造血細胞移植センター))
- 4 **日本の急性GVHD治療の現状**
村田 誠 (名古屋大学医学部附属病院 血液内科)
- 5 **日本国内のATGを用いたGVHD予防の現状**
藤 重夫 (独立行政法人 国立がん研究センター中央病院 血液腫瘍科・造血幹細胞移植科)
福田 隆浩 (独立行政法人 国立がん研究センター中央病院 血液腫瘍科・造血幹細胞移植科)

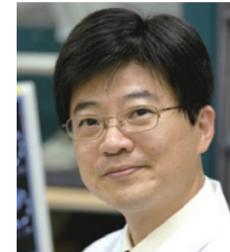
シンポジウム 6

10月21日(日) 9:00-11:10

発表言語：英語 E

多発性骨髄腫：新規治療法の開発に応用可能な基礎研究領域のトピックス Multiple Myeloma: Topics in Basic Science Applicable to the Development of Novel Therapies

座長 木崎 昌弘 (埼玉医科大学総合医療センター 血液内科)
飯田 真介 (名古屋市立大学大学院医学研究科 腫瘍・免疫内科学分野)



企画：飯田 真介 (リンパ系腫瘍：多発性骨髄腫など 領域別委員長)
名古屋市立大学大学院医学研究科 腫瘍・免疫内科学分野

概要紹介

本シンポジウムでは、多発性骨髄腫細胞とそれを支持する骨髄微小環境に関する最新の病態を理解し、新たな治療標的分子の同定と薬剤耐性化の克服に向けた基礎研究に焦点を当てる。保仙直毅先生には、骨髄腫幹細胞の起源の同定と骨髄腫の治療を目指した標的分子の探索研究をご紹介いただく。Suzanne Lentzsch先生には、免疫調節薬の標的分子の解析とその下流に存在するIRF4発現抑制経路に関して新たな治療法の可能性についてご紹介いただく。古川雄祐先生には、骨髄腫細胞と骨髄間質細胞との接着に関わる分子の同定から薬剤耐性化の機序、そしてその克服を目指した治療戦略についてご紹介いただく。安倍正博先生には、溶骨病変における破骨細胞の活性化や骨芽細胞の分化抑制が骨髄腫細胞を支持する機序について概説いただき、その悪性サイクルを断ち切る治療法の開発についてご紹介いただく。最後にKenneth Anderson先生に、骨髄腫細胞と骨髄微小環境を標的とした総合的な治療戦略、および開発途上にある新規化合物や抗体療法について概説いただく。本シンポジウムが、多発性骨髄腫に対する新しい治療戦略の紹介にとどまらず、多くの若い研究者に夢を与えて将来の治療を目指したトランスレーショナルリサーチへと繋がることを期待する。

- 1 **Myeloma-initiating cellの同定およびそれを標的とした抗体療法の開発**
Origin of the myeloma initiating cells and development of its targeting therapies
保仙 直毅 (大阪大学 癌ワクチン療法学)
- 2 **Intracellular targets of Immunomodulatory derivatives of thalidomide (IMiD®)**
Suzanne Lentzsch (Department of Medicine, Hematology-Oncology, Columbia University, USA)
- 3 **多発性骨髄腫における薬剤耐性のメカニズムとその克服**
How to overcome the cell adhesion-mediated drug resistance in multiple myeloma
古川 雄祐 (自治医科大学分子病態治療研究センター 幹細胞制御研究部)
- 4 **骨髄腫細胞と骨髄微小環境の相互作用を標的とする治療の開発**
Targeting the interplay between myeloma cells and the bone marrow microenvironment
安倍 正博 (徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 生体制御医学講座生体情報内科学)
- 5 **Targeting myeloma cells and their microenvironment**
Kenneth C. Anderson (Jerome Lipper Myeloma Center, Dana-Farber Cancer Institute, Harvard Medical School, USA)

CML/MDSの新たな展開 New Issues on the Pathophysiology and Treatment of CML/MDS

座長 松村 到 (近畿大学医学部内科学 血液・膠原病内科部門)
通山 薫 (川崎医科大学 検査診断学(病態解析))



企画：下田 和哉 (骨髄系腫瘍：CML、MPN、MDSなど 領域別委員長)
宮崎大学医学部内科学講座 消化器血液学分野

概要紹介

MDSにRNAスプライシング経路に関わる分子の変異が高頻度に見られることは、2011年の血液学の最大の発見の一つである。発見者である東京大学の小川誠司先生にMDSの、信州大学の小池健一先生に小児MDS/MPNの分子病態のご講演をいただく。新規薬剤が導入されMDSの治療選択肢が増えたが、それと同時にますます重要となってくる予後予測に関して、IPSSの改定とその意味するところを、長崎大学の宮崎泰司先生にご紹介いただく。

CMLに対し第2世代のチロシキナーゼ阻害剤が広く使われるようになり、イマチニブ時代と比べ、より早く、より深い分子寛解を目指した治療が行われている。臨床的な「治癒」も近い将来手に届く目標となっており、「どのような患者さんが、どのような状態であれば」治療を中止してよいのかの指標が求められる。一方、現在の治療によるコントロールが困難な患者さんに対しては、新規治療法の開発が必要である。CML領域は、この2つのトピックについて、名古屋大学の南陽介先生、東京医科大学の田内哲三先生にご講演いただく。

1 明らかになってきたMDSの分子病態

小川 誠司 (東京大学医学部附属病院 がんゲノミクスプロジェクト)

2 小児領域のMDS/MPNの分子病態

小池 健一 (信州大学医学部 小児医学)

3 IPSSの改定

宮崎 泰司 (長崎大学大学院医歯薬学総合研究科附属原爆後障害医療研究施設 原爆・ヒバクシャ医療部門 血液内科学(原研内科))

4 CML幹細胞の性状と治療戦略

南 陽介 (名古屋大学大学院医学系研究科 血液・腫瘍内科学)

5 CML新規治療の試み：ABL TKIsと分子標的薬との併用

田内 哲三 (東京医科大学病院 血液内科)

血液学会造血器腫瘍ガイドライン作成とTake Home Message

座長 黒川 峰夫 (東京大学大学院医学系研究科 血液・腫瘍内科学)
大西 一功 (浜松医科大学医学部附属病院 腫瘍センター)



企画：大西 一功 (骨髄系腫瘍：AML 領域別委員長)
浜松医科大学医学部附属病院 腫瘍センター

概要紹介

診療ガイドラインは「医師や患者が特定の臨床場面で適切な決断を下せるよう支援する目的で体系的な方法に則って作成した文書」と定義され、EBMに基づく作成方法が一般的である。今回、造血器腫瘍についても本邦での本格的なガイドラインが整備される事となった。

ガイドライン作成にあたっては、各状況下におけるclinical questionに対して標準療法は何かを科学的に示す事が必要であるが、造血器腫瘍では第III相試験で確認されたレジメンは少なく、エビデンスレベルの高いものは多くない。特に日本人を対象としたものは少ない。従って推奨グレードはエビデンスの強さを中心とするものの、十分なエビデンスがない場合は、広く行われている日常診療および保険適用等を含めた総合的なコンセンサスとせざるを得ない事が多い。こうした点から本ガイドラインでの推奨グレードはNCCNのコンセンサス・カテゴリーを採用した。本パネルディスカッションでは今回作成されるガイドラインを概説するとともにpublic commentを求めて討論する。

1 臨床試験のevidence level評価と診療ガイドラインの推奨grade

南谷 泰仁 (東京大学医学部附属病院 血液腫瘍内科)

2 乳がん診療ガイドライン作成の実際と他領域への提言

中村 清吾 (昭和大学医学部 乳腺外科学)

3 白血病診療ガイドライン作成のポイントとtake home message

薄井 紀子 (東京慈恵会医科大学附属第三病院 腫瘍・血液内科)

4 リンパ腫診療ガイドライン作成のポイントとtake home message

木下 朝博 (愛知県がんセンター中央病院 血液・細胞療法部)

5 骨髄腫診療ガイドライン作成のポイントとtake home message

村上 博和 (群馬大学医学部 保健学科)

6 支持療法ガイドライン作成のポイントとtake home message

秋山 暢 (帝京大学医学部 内科学)

ワークショップ1

10月21日(日) 9:00-10:00

発表言語：日本語

高齢者白血病・悪性リンパ腫治療に対するアプローチ —どのような症例にどう対処するか—

座長 大田 雅嗣 (福島県立医科大学 会津医療センター準備室 (血液内科))
青木 定夫 (新潟薬科大学薬学部 臨床薬学・臨床腫瘍学)



企画：大田 雅嗣

福島県立医科大学 会津医療センター準備室 (血液内科)

概要紹介

人口の高齢化に伴い血液腫瘍疾患の発症率は増加する。高齢者白血病・悪性リンパ腫の治療を考えると、一律に高齢者でも積極的に治療する、最初から緩和的治療をするといった対極的に論ずるのではなく、高齢者の有する併存疾患 (comorbidity)、高齢者自身の活動性 (ADL, PS) を考慮し予後を高める工夫が必要になってくる。この意味で高齢者に対する標準治療の設定は困難である。本ワークショップでは新規治療薬の開発がすすみ、高齢者血液腫瘍疾患治療の選択肢も増えてきている中、現時点での治療指針について論じてもらうとともに、緩和療法の工夫について第一線で臨床に携わっている先生からの経験話を話してもらい、治療選択に苦労された症例を呈示しフロアーの先生からも意見を聞く場を提供したい。

1 高齢者白血病 (主として AML) の生物学的特徴と治療指針

菊川 昌幸 (東京医科大学病院 老年病科)

2 高齢者白血病治療の支持療法・緩和療法の実際

堤 久 (多摩北部医療センター 血液内科)

3 高齢者悪性リンパ腫 (主として NHL) の生物学的特性と治療指針

鈴宮 淳司 (島根大学医学部附属病院 腫瘍センター)

4 高齢者悪性リンパ腫の支持療法・緩和療法の実際

角田 三郎 (福島県立医科大学 会津医療センター準備室 (血液内科))

ワークショップ2

10月21日(日) 10:10-11:10

発表言語：日本語

血液疾患患者さんの不妊対策

座長 谷本 光音 (岡山大学病院 血液・腫瘍科)
大谷 貴子 (全国骨髄バンク推進連絡協議会 前会長)



企画：大谷 貴子

全国骨髄バンク推進連絡協議会 前会長

概要紹介

造血細胞移植による不妊については以前から指摘をされてきた。男性患者の精子保存はすでに確立されているものの、血液内科医 (もしくはそこに紹介されるまでの一般内科医) による初診時における対応はまだ不十分である。女性患者の未受精卵保存においては、その手技はこの日本で開発され、すでに生産児が報告されている。しかしながら、日本での白血病患者における採卵は、血液内科医と産婦人科医 (生殖医療医) とのコミュニケーション不足もあり、なかなか採卵できないと考えられている。

近年は、以前のような化学療法を一旦中止して排卵を待つ方法ではなく、化学療法のタイミングに合わせた採卵方法も検討されてきており、患者への負担は軽くなっていると思われる。そのためには初診時からの産婦人科医 (生殖医療医) と血液内科医の双方向コミュニケーションが求められている。

このワークショップでは、日本における血液疾患患者さんの不妊対策の現状と最新の情報を提供し、造血細胞移植が目指している本来の使命を再確認することを目的としたい。ただ単に白血病という病気を治すのではなく、その人の命を救い、その人の人生を救い、さらに次への命として繋いでいくことの素晴らしさを理解する一助になればと願う。

1 血液疾患患者さんの性腺機能障害とその対策

神田 善伸 (自治医科大学附属さいたま医療センター 血液科)

2 化学療法時の精子凍結保存の現状と問題点

西山 博之 (筑波大学医学医療系 腎泌尿器外科学)

3 白血病患者からの卵子採取と保存～臨床研究5年目に入っている新たな取り組み

寺元 章吉 (新橋夢クリニック)

教育講演 一覧

骨髄不全症候群

- EL-1 BMF-1 : 再生不良性貧血とMDSの鑑別：小児科の立場から** 20日(土)午後
座長 小島 勢二(名古屋大学)・中尾 真二(金沢大学)
演者 濱 麻人(名古屋大学 小児科)
- EL-2 BMF-2 : 再生不良性貧血とMDSの鑑別：内科の立場から**
演者 通山 薫(川崎医科大学 検査診断学(病態解析))
- EL-3 BMF-3 : 再生不良性貧血の重症度別治療方針**
演者 臼杵 憲祐(NTT東日本関東病院 血液内科)
- EL-4 MDS : MDSのリスク別治療方針** 20日(土)午後
座長 宮崎 泰司(長崎大学)
演者 市川 幹(東京大学医学部附属病院 血液・腫瘍内科)
- EL-5 PNH : PNHの病態と治療** 20日(土)午後
座長 高月 清(熊本大学/北野病院)
演者 中熊 秀喜(和歌山県立医科大学 血液内科)

急性リンパ性白血病

- EL-6 ALL-1 : 成人ALLの治療方針** 19日(金)午前
座長 坂巻 壽(都立駒込病院)
演者 竹内 仁(日本大学医学部内科学系 血液膠原病内科学分野)
- EL-7 ALL-2 : 小児ALLの治療方針** 19日(金)午前
座長 林 泰秀(群馬県立小児医療センター)
演者 堀部 敬三(国立病院機構名古屋医療センター 臨床研究センター)

急性骨髄性白血病

- EL-8 AML-1 : AMLの分子病態と診断** 20日(土)午前
座長 恵美 宣彦(藤田保健衛生大学)
演者 麻生 範雄(熊本大学大学院生命科学研究部 血液内科学)
- EL-9 AML-2 : AMLの治療** 20日(土)午前
座長 宮脇 修一(東京都立大塚病院)
演者 大竹 茂樹(金沢大学医薬保健研究域保健学系 病態検査学)

慢性骨髄性白血病

- EL-10 CML-1 : CMLの標準治療** 19日(金)午後
座長 薄井 紀子(東京慈恵会医科大学附属第三病院)
演者 木村 晋也(佐賀大学医学部 血液・呼吸器・腫瘍内科)
- EL-11 CML-2 : CML : 治療関連有害事象のマネジメント** 19日(金)午後
座長 檀 和夫(日本医科大学)
演者 高橋 直人(秋田大学医学部 第3内科(血液腎臓膠原病内科))

骨髄増殖性腫瘍

- EL-12 MPN-1 : PV, ET, PMFの分子病態と治療総論** 19日(金)午後
座長 東條 有伸(東京大学医科学研究所)
演者 小松 則夫(順天堂大学医学部 血液内科)
- EL-13 MPN-2 : JAK2阻害薬によるMPNの治療** 19日(金)午後
座長 片山 直之(三重大学)
演者 幣 光太郎(宮崎大学医学部 内科学講座消化器血液学分野)

悪性リンパ腫

- EL-14 HL-1 : ホジキンリンパ腫の病理診断** 19日(金)午前
座長 阿部 正文(福島県立医科大学)
演者 田丸 淳一(埼玉医科大学総合医療センター)
- EL-15 HL-2 : ホジキンリンパ腫の標準治療とResearch Questions** 19日(金)午前
座長 高折 晃史(京都大学)
演者 鈴木 達也(名古屋第二赤十字病院 血液・腫瘍内科)
- EL-16 NHL-1 : 濾胞性リンパ腫の標準治療とResearch Questions** 19日(金)午前
座長 木下 朝博(愛知県がんセンター中央病院)
演者 石澤 賢一(東北大学大学院医学系研究科 血液分子治療学寄附講座)
- EL-17 NHL-2 : びまん性大細胞型B細胞リンパ腫の標準治療とResearch Questions** 19日(金)午前
座長 小椋 美知則(名古屋第二赤十字病院)
演者 山本 一仁(愛知県がんセンター中央病院 血液・細胞療法部)
- EL-18 NHL-3 : びまん性大細胞型B細胞リンパ腫の多様性と染色体・遺伝子異常** 21日(日)午前
座長 三谷 絹子(獨協医科大学)
演者 谷脇 雅史(京都府立医科大学 血液・腫瘍内科学)
- EL-19 NK/T : NK/T細胞リンパ腫：病態と治療に関する研究の進展** 21日(日)午前
座長 張替 秀郎(東北大学)
演者 山口 素子(三重大学大学院医学系研究科 血液・腫瘍内科学)
- EL-20 ATL : ATLに対する新薬開発の現状** 21日(日)午前
座長 上田 龍三(愛知医科大学)
演者 飛内 賢正(独立行政法人国立がん研究センター中央病院 血液腫瘍科・造血幹細胞移植科)

骨髄腫

- EL-21 MM-1 : 多発性骨髄腫の標準治療** 20日(土)午前
座長 清水 一之(愛知学院大学)
演者 得平 道英(埼玉医科大学総合医療センター 血液内科)
- EL-22 MM-2 : 多発性骨髄腫の合併症とそのマネージメント (骨病変・腎障害・末梢神経障害)** 20日(土)午前
座長 張 高明(新潟県立がんセンター新潟病院)
演者 坂井 晃(福島県立医科大学医学部 放射線生命科学講座)
- EL-23 MM-3 : 多発性骨髄腫に対する新規薬剤開発の動向** 21日(日)午後
座長 鈴木 憲史(日本赤十字社医療センター)
演者 黒田 純也(京都府立医科大学 内科学血液・腫瘍内科部門)

血栓・止血

- EL-24 HIT : ヘパリン起因性血小板減少症** 19日(金)午後
座長 尾崎 由基男(山梨大学)
演者 宮田 茂樹(国立循環器病研究センター 輸血管理室)
- EL-25 DIC : DICの臨床** 19日(金)午後
座長 松下 正(名古屋大学)
演者 朝倉 英策(金沢大学附属病院 高密度無菌治療部)
- EL-26 VTE : 避難環境と静脈血栓塞栓症 : 東日本大震災による検診結果から** 19日(金)午後
座長 小嶋 哲人(名古屋大学)
演者 榛沢 和彦(新潟大学大学院 呼吸循環外科/新潟大学災害・復興科学研究所)
- EL-27 血友病 : 血友病治療の新たな動向** 19日(金)午後
座長 坂田 洋一(自治医科大学)
演者 嶋 緑倫(奈良県立医科大学 小児科)

造血幹細胞移植

- EL-28 移植感染症 : 造血幹細胞移植における感染症のピットフォール** 21日(日)午前
座長 岡本 真一郎(慶應義塾大学)
演者 森 慎一郎(聖路加国際病院 血液腫瘍内科)
- EL-29 移植病理 : 造血幹細胞移植合併症の病理診断** 21日(日)午前
座長 今村 雅寛(札幌北楡病院)
演者 大田 泰徳(虎の門病院 病理部)

治療法

- EL-30 免疫療法 : 造血器腫瘍に対する免疫療法** 21日(日)午後
座長 杉山 治夫(大阪大学)
演者 安川 正貴(愛媛大学大学院医学系研究科 生体統御内科学(第1内科))
- EL-31 分子標的 : 分子標的治療の開発動向** 21日(日)午後
座長 大屋敷 一馬(東京医科大学)
演者 永井 正(自治医科大学 内科学講座血液学部門)

輸血

- EL-32 TRALI : 輸血関連急性肺障害 (TRALI)** 21日(日)午後
座長 室井 一男(自治医科大学)
演者 岡崎 仁(日本赤十字社血液事業本部 中央血液研究所)

感染症

- EL-33 感染症 : 血液疾患に合併する重症感染症** 21日(日)午後
座長 石田 陽治(岩手医科大学)
演者 吉田 稔(帝京大学附属溝口病院 第4内科)
- EL-34 HBV : がん薬物療法に伴う肝炎ウイルス再活性化と対策** 21日(日)午前
座長 島 清彦(がん研究会有明病院)
演者 田中 靖人(名古屋市立大学大学院医学研究科 病態医科学)

一般

- EL-35 規制科学 : 再生医療/細胞治療とレギュラトリーサイエンス** 20日(土)午前
座長 堀田 知光(国立がん研究センター 理事長)
演者 松山 晃文(公益財団法人先端医療振興財団 再生医療開発支援部)
- EL-36 統計 : 臨床研究論文の読み方—統計を中心に—** 20日(土)午前
座長 上田 孝典(福井大学)
演者 熱田 由子(名古屋大学医学部 造血細胞移植情報管理・生物統計学)

造血システム

- EL-37 白血病幹細胞 : 白血病幹細胞** 20日(土)午前
座長 岩間 厚志(千葉大学)
演者 平尾 敦(金沢大学がん進展制御研究所 遺伝子・染色体構築研究分野)
- EL-38 幹細胞ニッチ : 造血幹細胞ニッチ** 20日(土)午前
座長 蘭田 精昭(関西医科大学)
演者 片山 義雄(神戸大学医学部附属病院 血液内科)
- EL-39 造血アッセイ : ヒト造血アッセイのための異種移植システムの進歩** 20日(土)午後
座長 安藤 潔(東海大学)
演者 竹中 克斗(九州大学病院 第1内科)
- EL-40 免疫系 : リンパ球の発生・分化システム** 21日(日)午前
座長 北村 俊雄(東京大学)
演者 織谷 健司(大阪大学大学院医学系研究科 血液・腫瘍内科学)

トピックス

- EL-41 テロメア：テロメアと発癌** 19日(金)午前
座長 浦部 晶夫 (NTT関東病院)
演者 石川 冬木 (京都大学大学院生命科学研究科統合生命科学専攻 細胞周期学分野)
- EL-42 好塩基球：アレルギーならびに生体防御における好塩基球の新たな役割
～日陰者が一気に檜舞台に～** 21日(日)午前
座長 溝口 秀昭 (東京女子医科大学)
演者 烏山 一 (東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 免疫アレルギー学分野)
- EL-43 iPS：血液疾患とiPS細胞** 20日(土)午後
座長 中畑 龍俊 (京都大学iPS細胞研究所)
演者 黒川 峰夫 (東京大学大学院医学系研究科 血液・腫瘍内科学)
- EL-44 免疫不全症：免疫不全症の遺伝子診断・治療のup-to-date** 21日(日)午後
座長 伊藤 悦朗 (弘前大学)
演者 今井 耕輔 (東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 小児・周産期地域医療学講座)
- EL-45 EBV：EBVと血液・腫瘍性疾患** 21日(日)午後
座長 水谷 修紀 (東京医科歯科大学)
演者 木村 宏 (名古屋大学大学院医学系研究科 ウイルス学分野)
- EL-46 放射線被曝：低線量放射線被ばくの長期的影響** 21日(日)午後
座長 朝長 万左男 (日本赤十字社 長崎原爆病院)
演者 明石 真言 (放射線医学総合研究所)
- EL-47 原発事故：Medical consequences of nuclear accidents:
Chernobyl and Fukushima** 19日(金)午前
座長 浅野 茂隆 (早稲田大学/東京大学 名誉教授)
演者 Robert Peter Gale (Section of Haematology, Division of Experimental Medicine, Department of
Medicine, Imperial College, UK)
- EL-48 Imaging：Bioimaging of stem cell functions in wound healing
and tumor development** 20日(土)午後
座長 珠玖 洋 (三重大学)
演者 Frank Marini (Wake Forest Institute for Regenerative Medicine, Wake Forest Comprehensive
Cancer Center, USA)
- EL-49 Stem cell GT：Recent progress in hematopoietic stem cell
gene therapy** 20日(土)午後
座長 谷 憲三郎 (九州大学)
演者 Fabio Candotti (Genetics and Molecular Biology Branch, NHGRI-NIH, USA)



教育講演 要旨

※非会員・海外招待演者による要旨です。

EL-26 血栓・止血 VTE

10月19日(金) 15:00-15:30

発表言語：日本語

座長 小嶋 哲人 (名古屋大学医学部 保健学科)



避難環境と静脈血栓塞栓症：東日本大震災による検診結果から

榛沢 和彦

新潟大学大学院呼吸循環外科・新潟大学災害・復興科学研究所

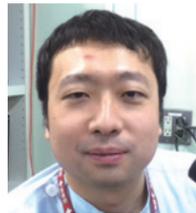
東日本大震災は津波被害が広域・甚大で多数の避難者が発生し、様々な地域で様々な避難所があった。これらの避難所でDVT検診を行ったところ、DVT頻度が時系列と地域によって大きな差を認めた。震災直後は津波被害の甚大な沿岸部の避難所で20-47%、内陸部の集団避難所で11-14%と内陸部で低かった。しかし震災1ヶ月後になると石巻市を除く沿岸部で10-11%、内陸部12-14%と両者に差がなくなっていた。一方、石巻市では1ヶ月後も26-45%と高かった。これらの差は避難所の収容人数、ライフラインと食料・水の充足などと関連があるものと思われ、厳しい環境の避難所ほどDVT頻度が高かった。

EL-29 造血幹細胞移植 移植病理

10月21日(日) 9:30-10:00

発表言語：日本語

座長 今村 雅寛 (札幌北極病院 血液内科)



造血幹細胞移植合併症の病理診断

大田 泰徳

虎の門病院 病理部

造血幹細胞移植が血液系腫瘍の治療として行われるようになって約30年が経過した。多くの知見が積み重なり、一口に骨髄移植といっても様々な点で多彩になっている。移植に伴う合併症も例外ではない。年々複雑化しており、病理診断が非常に難しい分野の一つである。検体採取という侵襲を伴った検査である病理診断により、侵襲のデメリットを越えて患者さんに役立つ情報を提供出来ているかと思うと、演者自身も後ろめたい思いがある。

本講演では、造血幹細胞移植合併症の病理診断として典型的な疾患及び最近の話題について解説する。日常診療の補助となれば幸いである。

EL-32 輸血 TRALI

10月21日(日) 14:20-14:50

発表言語：日本語

座長 室井 一男 (自治医科大学附属病院 輸血・細胞移植部)



輸血関連急性肺障害 (TRALI)

岡崎 仁

日本赤十字社血液事業本部 中央血液研究所

呼吸器症状を呈する輸血合併症のうち、輸血関連急性肺障害はもっとも重篤なものである。TRALIはALI/ARDSの概念に含まれると考えられ、呼吸管理以外、有効な治療手段に乏しい。治療法開発のための動物モデルによるTRALI機序解明の最近の進歩、TRALIの臨床研究による製剤側・患者側の危険因子の同定、TRALI予防のための男性由来血漿の優先利用の日本での導入状況などを含めたTRALIに関する最近の知見を概説するとともに、鑑別診断で重要な輸血関連循環過負荷 (TACO) の話題にも言及する。

EL-34 感染症 HBV

10月21日(日) 9:00-9:30

発表言語：日本語

座長 島 清彦 (財)がん研究会有明病院 血液腫瘍科)



がん薬物療法に伴うB型肝炎ウイルス再活性化と対策

田中 靖人

名古屋市立大学大学院医学研究科 病態医科学

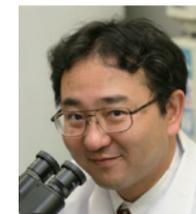
近年、高齢化社会の中で各種がん患者が増加し、分子標的治療や強力な抗がん剤・免疫抑制剤の使用に伴うB型肝炎ウイルス (HBV) 再活性化の問題が表面化してきている。特に、臨床的に治癒していると思われたHBs抗原陰性例 (HBe抗体陽性の既往感染例) においてHBVが再び増殖し、肝炎を引き起こす病態をde novo肝炎と呼び、大きな社会問題となっている。2009年1月、厚生労働省研究班による免疫抑制・化学療法に伴うB型肝炎対策ガイドラインが発表され、最近若干の修正が加えられた。血液疾患のみならず、リウマチ疾患や固形癌などからのHBV再活性化の報告もされ、再活性化ハイリスク群の同定および肝炎発症予防の標準的対策法を確立することは急務の課題である。

EL-35 一般 規制科学

10月20日(土) 9:30-10:00

発表言語：日本語

座長 堀田 知光 (国立がん研究センター 理事長)



再生医療/細胞治療とレギュラトリーサイエンス

松山 晃文

(公財)先端医療振興財団 再生医療開発支援部

再生医療/細胞治療におけるRegulatory Science (RS)の射程は、予測されるrisk (possibility of harm)を抽出評価し(品質・安全性)、benefit (有効性)とのtrade-offにて許容できる治療なのか、規制に根拠 (Science) を与えることにある。本講演ではRSの主要なapproachであるRisk-based Approachについて具体例を挙げて議論し、次いであるべき姿としてのScientific Regulation (根拠のある規制)に触れる。

EL-41 トピックス テロメア

10月19日(金) 10:10-10:40

発表言語：日本語

座長 浦部 晶夫 (NTT関東病院 顧問)



テロメアと発癌

石川 冬木

京都大学大学院生命科学研究所 統合生命科学専攻 細胞周期学分野

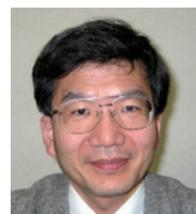
近年の癌ゲノム研究の進展によって、染色体の構造異常が、従来考えられていたよりも高頻度で正常細胞の癌化に寄与していることを明らかになりつつある。しかし、染色体不安定性がどのような分子機構で生じるのかは、十分に明らかにされていない。染色体末端テロメアはDNA末端を保護し、安定な染色体の維持に寄与する。テロメア結合蛋白質、テロメラーゼ、テロメア機能異常による染色体不安定性について、これまでの研究から明らかにされていること、今後、重要になるとされる未解決の問題をそれぞれ議論したい。

EL-42 トピックス 好塩基球

10月21日(日) 10:40-11:10

発表言語: 日本語

座長 溝口 秀昭 (東京女子医科大学)



アレルギーならびに生体防御における好塩基球の新たな役割 ～日陰者が一気に檜舞台に～

烏山 一

東京医科歯科大学・大学院医歯学総合研究科・免疫アレルギー学分野

好塩基球は、末梢白血球のわずか0.5%を占めるに過ぎない極少血球細胞集団であり、生体内での存在意義に関してほとんど解明が進んでいなかった。ところがこの数年の間に、アレルギー反応や免疫制御において好塩基球が極めて重要な役割を果たしていることが明らかとなり、これまで日陰者扱いされていた好塩基球が、にわかに注目を集めるようになった。本講演では、「好塩基球によるアレルギー誘導機構」と「好塩基球による寄生虫排除機構」を中心に、生体内における好塩基球のユニークな役割について討議したい。

EL-45 トピックス EBV

10月21日(日) 13:40-14:10

発表言語: 日本語

座長 水谷 修紀 (東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 発達病態学小児科学分野)



EBVと血液・腫瘍性疾患

木村 宏

名古屋大学大学院医学系研究科 ウイルス学分野

Epstein-Barr virus (EBV) は伝染性単核症の原因ウイルスであり、パーキットリンパ腫・ホジキン病の一部・移植後リンパ増殖症などB細胞リンパ腫/リンパ増殖性疾患と関連している。一方、EBVはB細胞のみならずT細胞・NK細胞にも感染し、節外性NK/Tリンパ腫・鼻型、アグレッシブNK細胞白血病など様々なT/NKリンパ腫・白血病/リンパ増殖性疾患との関連も明らかにされてきた。本講演では、これらEBV関連血液・腫瘍疾患の発症病理・臨床像・治療について概説する。

EL-47 トピックス 原発事故

10月19日(金) 10:40-11:10

発表言語: 英語 E

座長 浅野 茂隆 (早稲田大学健康医療・先端科学融合研究機構/東京大学名誉教授)



Medical consequences of nuclear accidents: Chernobyl and Fukushima

Robert Peter Gale

Section of Haematology, Division of Experimental Medicine, Department of Medicine, Imperial College, London, UK

Exposure to ionizing radiations results in immediate and long-term medical effects. These effects can be classified as deterministic and stochastic. Immediate effects typically occur within the 1st year but can also occur over the 1st 10 years after exposure. In contrast, long-term effects typically begin after 5-10 years following exposure and may extend over 50 or more years. This presentation will review medical consequences of these accidents.

EL-48 トピックス Imaging

10月20日(土) 14:45-15:15

発表言語: 英語 E

座長 珠玖 洋 (三重大学大学院医学系研究科 がんワクチン治療学、遺伝子・免疫細胞治療学)



Bioimaging of stem cell functions in wound healing and tumor development

Frank Marini

Wake Forest Institute of Regenerative Medicine, Wake Forest Comprehensive Cancer Center, USA

The development and progression of tumors appears to follow a similar paradigm to regenerating tissues in which both local and systemic stem cells are recruited into the tumor or tissue to develop the environmental stroma. We sought to address the questions of homing, incorporation, and participation of both transplanted or recruited stem cells into wound healing or tumor development in animal models. This presentation will outline imaging strategies such as light microscopy techniques (linear and non linear) with non-invasive, invasive, and intravital imaging, to identify time dependent events as well as biological interactions occurring in real time at the wound site.

EL-49 トピックス Stem cell GT

10月20日(土) 15:15-15:45

発表言語: 英語 E

座長 谷 憲三郎 (九州大学生体防御医学研究所 ゲノム病態学分野)



Recent progress in hematopoietic stem cell gene therapy

Fabio Candotti

Genetics and Molecular Biology Branch, NHGRI-NIH, USA

Gene transfer into the hematopoietic stem cell has curative potential for a variety of hematological disorders. Primary immunodeficiency diseases have led the way in this field of gene therapy as an example and a model. Results from the past ten years have shown that significant improvement and even cure can be achieved for diseases such as X-linked SCID, ADA-SCID, CGD and Wiskott-Aldrich syndrome. Unfortunately, with the initial clear clinical benefits, the first serious complications of gene therapy have also occurred and sparked a revision of the assessment of risks and benefits that will be critical for future development of gene therapy.

Meet-the-Professional 討論要旨

◆10月19日(金) 12:10 ~ 13:00

若手医師に魅力ある科にするために一血液診療医を増やす方策を考えるー

大野 竜三 (愛知県がんセンター 名誉総長)

血液診療科は患者数の少ない不採算部門とみなされ、現行の保険報酬では赤字状態にあることより、公的病院でしか運営できず、スタッフ増などは期待できない。死亡患者は多く、夜間呼び出しも頻繁で、これらを嫌う若い医師に敬遠されている。一方、若手医師に人気があり後期研修志望者を断っている例外的な血液診療科もある。このような病院や全医師数比で血液専門医の多い地域の理由を考察し、血液診療医を増やす方策を提言したい。

新規 siRNA 治療薬開発の米国での経験

新津 洋司郎 (札幌医科大学 分子標的探索講座)

大学発の翻訳研究 (TR) を実際に臨床開発の段階まで持ち込む為には多くの克服しなければならないバリアーが存在する。有効な産学官の連携、知財戦略、プロジェクトマネージメント、CMC(chemistry, manufacturing and control), 等々である。演者はたまたま大学で始めた臓器線維症 (肝硬変、肺線維症、骨髄線維症等) の治療薬の研究が、某企業の支援を得て、米国で臨床開発を始める機会を得た。その経緯を述べて、同様な TR を計画している研究者の参考に資したい。

造血幹細胞移植

原田 実根 (大牟田病院)

造血幹細胞移植 (HSCT) の prototype である同種骨髄移植を成功させるためには、1) HLA が遺伝的に一致する同胞ドナー、2) 生着を確実にする骨髄破壊的移植前治療、3) 無菌室隔離などの強力な支持療法、が不可欠と考えられていた。その後、これらの central dogma に挑戦する試みによって、HSCT は大きく進化、多様化し、HSCT は exciting な時代を迎えている。

有効な薬を早く届けるために

堀田 知光 (国立がん研究センター 理事長)

わが国のがん医療における主要な課題の一つとしてドラッグ・ラグが言われて久しい。日本の新薬開発は創薬基盤が脆弱ため有望な基礎研究のシーズが海外に流出し、内外格差を生んでいる状況は変わっていない。医療上の必要性が高い適応外薬については、検討会において開発要請もしくは公知申請を促す仕組みが一定の成果をあげているが、根治的には保険償還のあり方を変える日本版コンパニディアの導入が必要である。新薬開発と適応外使用のあり方を考える。

◆10月20日(土) 12:10 ~ 13:00

4P 医療における倫理的、法的、社会的対応

浅野 茂隆 (早稲田大学 健康医療・先端科学融合研究機構/東京大学 名誉教授)

ポストゲノム時代に入って、通信情報技術を駆使する予測 (Predictive)、予防 (Preventive)、個別化 (Personalized)、市民参加 (Participatory) を重視した医療、すなわち、4 P 医療が求められている。その推進に当たっては、社会的、法的、倫理的観点から改めて考えるべきことは少なくない。私自身が血液学の研究と診療の経験における幾つかの関心事の中からとくに重要と考えている共有研究資源の構築と利用のあり方を課題として提起し、その対応について共に考えていく機会になることを期待している。

Toward the development of novel therapies for T- and NK-cell lymphomas

押味 和夫 (エーザイ株式会社/元・順天堂大学、東京女子医科大学 血液内科)

末梢性 T 細胞リンパ腫 (PTCL) と節外性 NK/T 細胞リンパ腫、鼻型 (ENKL) は、B 細胞性リンパ腫に比べ頻度が低い、病態に不明な点が多い、治療成績が劣るなどの特徴がある。このようなリンパ腫の治療成績を向上させるにはどのような作戦が考えられるか。まず既存の抗がん剤をどう組み合わせるのがいいのか ENKL の SMILE 療法を中心に述べる。次に新規抗がん剤開発の現状や問題点を解説し、今後の方向性を考察する。

MDS 診断への最も確実なアプローチ

朝長 万左男 (日本赤十字社 長崎原爆病院)

MDS の有無の判定は多くの血球減少症の鑑別に必須である。MDS はクローン性疾患であり、末梢血中の好中球、赤血球、血小板の大部分は異常クローンに属しており、それらに形態学的異形成を検出することが最も確実な診断への入り口となる。なかでも好中球の異形成の判定に習熟すると、MDS の有無を末梢血で判定できるようになる。最も簡便な末梢血メイグムザ標本による異形成の定量的な判定が MDS の診断に直結することを解説する。

血友病インヒビターと ITI (免疫寛容導入) 療法

吉岡 章 (奈良県立医科大学 学長)

血友病 A 患者に因子補充療法を行うと、患者の 20 ~ 30% に第 VIII 因子インヒビター (同種中和抗体) が発生する。そのインヒビターを消滅~低下させる目的で ITI 療法が行われ、有効率は 70 ~ 75% である。ISTH が高用量 (200 U/kg 連日) vs 低用量 (50 U/kg 週 3 回) で実施した国際 ITI 研究 (115 例) の結果 (日本人 16 症例を含む) を紹介すると共に、ITI の実際と問題点を考える。

Morning Discussion (Meet-the-Expert) 討論要旨

◆10月20日(土) 8:00～8:50

再生医学研究の動向

平家 俊男 (京都大学 発生発達医学(発達小児科学))

ヒトES細胞、ヒトiPS細胞は、直接窺い知れないヒト組織の発生機構や、生体では解明困難な疾患の発症機序を解明する有用なツールとして期待が高まっている。特に患者さん由来のiPS細胞を用いて試験管内や動物体内でヒト疾患を再現することが可能であり、詳細な病態解明、治療基盤開発を目指して、精力的に研究が進められている。セッションでは、同細胞を用いた造血発生機構の解明、疾患の病態解析、再生医療への応用について、自験例を踏まえて概説する。

分子病態研究の醍醐味

下田 和哉 (宮崎大学 消化器血液学分野)

真性多血症、本態性血小板血症、原発性骨髄線維症などの骨髄増殖性腫瘍(MPN)に共通して*JAK2*変異がみられることが報告されたのは2005年である。その後*TET2*、*EZH2*の変異などが見出され分子メカニズムが明らかになるとともに、*JAK2*阻害剤の開発も進み、2011年にFDAは、骨髄線維症を適応として*JAK2*阻害剤を承認した。MPNを例にとり、発症機構の研究と分子標的療法の可能性、その限界につき考えたい。

骨髄異形成症候群の形態診断

波多 智子 (長崎大学 分子治療研究分野(原研内科))

骨髄異形成症候群(MDS)は血球減少と無効造血を特徴とするクローン性疾患である。遺伝子異常やフローサイトメトリーによる診断はまだ一般的ではなく、細胞形態学が診断における基本である状況は変わらない。しかし、診断が客観性に乏しく、異形成がMDSに特有のものでないことなど診断は容易ではない。本セッションでは、芽球の判定、異形成の質的および定量的評価の試みなど形態診断をより確実にするための注意点について解説する。

魅力溢れる最新骨髄腫病学—如何に病歴を取り、巧みに診察し、新規画像診断を駆使し、詳細に診断し、きちんと診察するか?— ー多臓器浸潤性疾患としての骨髄腫を理解しよう

三輪 哲義 (国立国際医療研究センター病院 血液内科)

骨髄腫は多剤併用療法を駆使してもMP療法を凌駕できなかった時代をこえ、造血幹細胞移植、プロテアソーム阻害剤、IMiDsなどがルーチンの医療となり、さらにHDAC阻害剤、抗CS1抗体等の各種抗骨髄腫薬の開発も相次いでいます。「科学は困難を克服するためにある」ことを実践し続けている領域の一つが骨髄腫病学です。

今回は、この治療学の進歩を日々の診療に最大限に活かすために、以下の諸点をお話させていただきます。①骨痛や貧血や腎障害以外にも、羽ばたき振戦や耳朶の壊死などが症状となりうる臨床像のスペクトラムの広さ、②骨折の予測可能な骨病変の診察法やアミロイド沈着の診察法。③当センターで実施中の新規アミノ酸PETやチオチミジンPET (in vivo labelling index) の有用性を含めた斑状分布を示す骨髄腫の画像診断のあり方、④骨髄腫細胞の生物学の解析と①②③で得られた総合所見に基づく詳細な診断、⑥これらに基づく診療、の6項目です。

加えて多数の剖検例から、骨髄腫細胞が進行期に全身に浸潤している事実に関するところもご紹介させて頂き、骨髄腫の病態の把握法を共に議論させて頂きたいと考えています。共に学びましょう！

凝固線溶系データを読み解く

窓岩 清治 (自治医科大学 分子病態研究部/自治医科大学附属病院 血液内科)

出血性疾患や血栓性疾患は、日常臨床で取り扱う機会の多い重要な診療テーマのひとつです。本セッションでは、血液凝固を必ずしも得意分野とされていない血液内科医や、将来血液学を志す研修医の方々を主な対象とします。参加者の活発なディスカッションを通して、凝固線溶系検査を読み解くことによって病態を正確に把握し、適切な診療へと繋げることでできる能力を得るための機会を提供したいと考えております。

国際化時代を生き抜くヘマトロジスト

木村 晋也 (佐賀大学 血液・呼吸器・腫瘍内科)

国際化時代を生き抜くためには、留学を通じて得るところは非常に多い。筆者は、オーストラリア(WEHI研究所での“ど”基礎研究)、ドイツ(Frankfurt 大学での臨床検体を用いた研究)、そしてアメリカ(MD Anderson がんセンターでの bafetinibの臨床試験)と3ヶ国での留学経験を有する。留学の楽しさ、苦しさ、留学助成金や給料の獲得方法などについて、実体験に基づいて参加者と討論をしたい。

◆10月21日(日) 8:00～8:50

よくわかるゲノム解析入門

稲澤 讓治 (東京医科歯科大学難治疾患研究所)

パーソナルゲノムシークエンス時代を迎え、がんを含む生活習慣病、さらに希少性疾患をはじめとする難病の原因遺伝子の同定と病態解明、さらに、それらの克服に大きなチャンスが到来している。ゲノムシークエンス解析技術は当初の予想を超えて進んでおり、全ゲノム情報の医療への利活用は必至となりつつある。顕微鏡を通して見る染色体から新世代シーケンサーによるClinical sequencingまでを分かりやすく語る

治療標的としての白血病幹細胞

平尾 敦 (金沢大学がん進展制御研究所 遺伝子・染色体構築研究分野)

昨今、白血病の中に“幹細胞の性質”を持った細胞、いわゆる白血病幹細胞の存在が示され、白血病の発生や治療耐性メカニズム解明の切り札として注目されている。白血病幹細胞について、造血幹細胞との異同、ニッチ、治療への応用など、次々と新知見が見出され、様々な議論が交わされている。本カンファレンスでは、講師自身の研究の経験と最近の知見を織り交ぜ、その実体と研究の方向性について概説する。

血液疾患診療に必要な病理知識

中村 栄男 (名古屋大学病院 病理部)

病理診断は、組織所見の認識に始まり、臨床病態の正確な把握、臨床診断との整合性の評価、生物学的特性の検索、疾病分類の批判、さらに新たな疾病概念の探索に至る過程といえる。診療に必要な病理知識は、1) 病変が腫瘍性か反応性か、前者の場合、血液疾患か否かの判断、2) 病理診断と臨床病態の乖離に対する批判、3) 診断による治療法の差別化・個別化、4) 本態が定まらぬ場合、病理診断の限界についての認識に要約される。

造血幹細胞移植：急性および慢性GVHD対策

豊嶋 崇徳 (北海道大学 血液内科学)

GVHD対策は同種造血幹細胞移植医療の根幹です。GVHDの不安を抱えている患者に接するには、GVHDを正しく理解し、正しく説明できなければ信頼は得られません。GVHDは長い経過で多様な症状を呈するのみならず、二次的に多様で複雑な合併症を引き起こし、全体像がつかみにくく、対応が難しい原因となっています。本セミナーでは、GVHDを通して、長い移植治療の全体像が理解されることを期待しています。

先天性骨髄不全症候群を巡る最新の話題

真部 淳 (聖路加国際病院 小児科)

小児で血球減少を来す疾患として先天性骨髄不全症候群は重要です。遺伝性鉄芽球性貧血、先天性巨大血小板性血小板減少症、Fanconi貧血、先天性角化不全症、Shwachman-Diamond症候群、重症先天性好中球減少症、Diamond-Blackfan貧血、Congenital dyserythropoietic anemiaにおいて、近年責任遺伝子が同定されました。血液学のエスプリをご賞味下さい。

血液分野における女性医師のキャリア形成

三谷 絹子 (獨協医科大学 内科学(血液))

血液学会は、他の学会に比べて女性の会員が多いのではないのでしょうか?特に最近若手の女性医師の姿が目立ちます。しかしながら、女性が子供をかかえてキャリアを継続するのは容易なことではありません。これを機会に日本血液学会の女性会員の動向をまとめ、当日のディスカッションをとおして女性医師が抱える問題を浮き彫りにしたいと思います。あらゆる世代の女性会員と男性の積極的なご参加をお待ちしています。



コーポレートセミナーのご案内

コーポレートセミナー 一覧

◆第1日目 10月19日(金)

CS-1 The choice of stem cell source for unrelated SCT

座長 松本 公一(名古屋第一赤十字病院 小児医療センター 血液腫瘍科)
演者 Claudio Anasetti (Department of Blood and Marrow Transplantation, Moffitt Cancer Center, USA)
共催 中外製薬株式会社

CS-2 MDS治療薬ビダーザの実地診療における治療のポイント

座長 安藤 潔(東海大学医学部 内科学系血液内科)
演者 石川 隆之(神戸市立医療センター中央市民病院 免疫血液内科)
演者 城 達郎(日本赤十字社 長崎原爆病院 血液内科)
共催 日本新薬株式会社

CS-3 ポテリジオ時代のATL診療

座長 宇都宮 與(公益財団法人慈愛会今村病院分院)
演者 石田 高司(名古屋市立大学大学院医学研究科 腫瘍・免疫内科学)
共催 協和発酵キリン株式会社

CS-4 移植後早期の感染管理 JSHCTガイドライン第2版

座長 宮村 耕一(名古屋第一赤十字病院 血液内科(造血細胞移植センター))
演者 福田 隆浩(国立がん研究センター中央病院 造血幹細胞移植科)
共催 ファイザー株式会社

CS-5 MRSA感染症 Up to Date

座長 戸塚 恭一(東京女子医科大学 感染対策部感染症科)
演者 松本 哲哉(東京医科大学 微生物学講座/東京医科大学病院 感染制御部)
共催 MSD株式会社

CS-6 Latest topics of Indolent NHL treatment, including radioimmunotherapy

座長 飛内 賢正(独立行政法人 国立がん研究センター中央病院 血液腫瘍科・造血幹細胞移植科)
演者 Anton Hagenbeek (Department of Hematology, University Medical Center Utrecht, The Netherlands)
共催 バイエル薬品株式会社

CS-7 The latest topics of PNH management in the era of Eculizumab

座長 金倉 譲(大阪大学大学院医学系研究科 血液・腫瘍内科学)
演者 Peter Hillmen (Department of Haematology, St. James's Institute of Oncology, UK)
共催 アレクシオンファーマ合同会社

CS-8 造血器腫瘍に対する化学療法中のHBV再活性化対策

座長 畠 清彦((財)がん研究会有明病院 血液腫瘍科)
演者 楠本 茂(名古屋市立大学大学院医学研究科 腫瘍・免疫内科学)
共催 ブリストル・マイヤーズ株式会社

CS-9 APLとDIC

座長 宮脇 修一(東京都立大塚病院 輸血科)
APLに合併したDICに対するATRAとリコモジュリンの併用効果について
演者 池添 隆之(高知大学医学部血液・呼吸器内科)

急性前骨髄球性白血病(APL)早期死亡例の解析ー遺伝子組換え型トロンボモジュリン(rhs-TM)使用成績調査における検討

演者 松下 正(名古屋大学医学部附属病院 輸血部)
共催 旭化成ファーマ株式会社

CS-10 合併症から考える骨髄腫治療戦略Update ~腎臓、骨、アミロイドーシス~

座長 鈴木 憲史(日本赤十字社医療センター 血液内科部)
演者 石田 禎夫(札幌医科大学 内科学第一講座)
共催 ノバルティス ファーマ株式会社

CS-11 発熱性好中球減少症の現状とマネジメント

座長 田村 和夫(福岡大学医学部 腫瘍・血液・感染症内科学)
血液疾患治療中の感染予防
演者 藤田 浩之(済生会横浜市南部病院 血液内科)

発熱性好中球減少症のマネジメント

演者 秋山 暢(帝京大学医学部 内科学講座)
共催 大正富山医薬品株式会社

CS-12 Novel Targeted Therapies of Multiple Myeloma

座長 岡本 真一郎(慶應義塾大学医学部 血液内科)
演者 Kenneth C. Anderson(Jerome Lipper Myeloma Center, Dana-Farber Cancer Institute, Harvard Medical School, USA)
共催 セルジーン株式会社

CS-13 非ホジキンリンパ腫における最近の治療とマネジメント

座長 鶴池 直邦(独立行政法人 国立病院機構 九州がんセンター 血液内科)
演者 石澤 賢一(東北大学大学院医学系研究科 血液分子治療学寄附講座)
共催 サノフィ・アベンティス株式会社

◆第2日目 10月20日(土)

CS-14 Novel treatment approaches to MCL

座長 堀田 知光 (国立がん研究センター 理事長)
演者 Wyndham Wilson (National Cancer Institute, USA)
共催 中外製薬株式会社

CS-15 Treatment strategy for newly diagnosed multiple myeloma

座長 清水 一之 (愛知学院大学歯学部 多発性骨髄腫集学的治療講座)
演者 Sagar Lonial (Department of Hematology and Medical Oncology, Winship Cancer Institute, Emory University School of Medicine, USA)
共催 ヤンセン ファーマ株式会社/武田薬品工業株式会社

CS-16 血液疾患領域の深在性真菌症管理

座長 吉田 稔 (帝京大学附属溝口病院 第4内科)
演者 石田 陽治 (岩手医科大学 内科学講座 血液・腫瘍内科分野)
共催 アステラス製薬株式会社

CS-17 T細胞性リンパ腫に対する最新の治療動向

座長 上田 龍三 (愛知医科大学医学部教授 腫瘍免疫寄付講座)
演者 小椋 美知則 (名古屋第二赤十字病院 血液・腫瘍内科)
共催 Meiji Seikaファルマ株式会社

CS-18 再生不良性貧血に対する免疫抑制療法：最近の話題

座長 張替 秀郎 (東北大学病院 血液免疫科)
演者 中尾 眞二 (金沢大学大学院医学系研究科 細胞移植学)
共催 サノフィ・アベンティス株式会社

CS-19 免疫・造血不全症と感染症

座長 大屋敷 一馬 (東京医科大学 内科学第一)
演者 大賀 正一 (九州大学 成長発達医学)
共催 塩野義製薬株式会社

CS-20 血友病性関節症における定期補充療法のメリット

座長 西田 恭治 (国立大阪医療センター 感染症内科)
演者 藤井 輝久 (広島大学病院 輸血部)
共催 ファイザー株式会社

CS-21 Advances in the therapy of myeloid neoplasms

座長 三谷 絹子 (獨協医科大学 内科学(血液))
演者 Farhad Ravandi-Kashani (Department of Leukemia, University of Texas-MD Anderson Cancer Center, USA)
共催 セルジーン株式会社

CS-22 ITP診療の問題解決 ～日頃の疑問にお答えします～

座長 藤村 欣吾 (安田女子大学 共通教育部)
演者 宮川 義隆 (慶應義塾大学医学部内科学(血液))
共催 グラクソ・スミスクライン株式会社

CS-23 フィラデルフィア染色体陽性白血病の治療戦略

座長 松村 到 (近畿大学医学部内科学 血液・膠原病内科部門)
演者 薄井 紀子 (東京慈恵会医科大学附属第三病院 腫瘍・血液内科)
演者 木崎 昌弘 (埼玉医科大学国際医療センター 血液内科)
共催 ノバルティス ファーマ株式会社

CS-24 再生不良性貧血及びHLA半合致移植におけるATG(ゼットブリン)の使用成績と役割

座長 小寺 良尚 (愛知医科大学医学部 造血細胞移植振興寄附講座)
再生不良性貧血におけるゼットブリンの使用成績調査について
演者 岡本 隆弘 (宝塚市立病院 血液内科兼内科)

HLA半合致移植におけるATGの役割

演者 小川 啓恭 (兵庫医科大学 内科学血液内科)
共催 日本臓器製薬株式会社

◆第3日目 10月21日(日)

CS-25 新規薬剤時代の多発性骨髄腫治療を考える

座長 島崎 千尋 (社会保険京都病院)
演者 張 高明 (新潟県立がんセンター新潟病院 内科)
演者 尾崎 修治 (徳島県立中央病院 内科)
共催 ヤンセン ファーマ株式会社/武田薬品工業株式会社

CS-26 悪性リンパ腫における遺伝子変異情報をどう生かすか

座長 下田 和哉 (宮崎大学医学部内科学講座 消化器血液学分野)
演者 富田 章裕 (名古屋大学医学部附属病院 血液内科)
共催 株式会社ヤクルト本社

CS-27 Philadelphia 染色体陽性急性リンパ性白血病の新たな治療戦略

座長 坂巻 壽 (都立駒込病院 血液内科)
演者 杉浦 勇 (豊橋市民病院)
共催 ブリストル・マイヤーズ株式会社

CS-28 最新のガイドラインを眺めながら真菌感染症を考える

座長 安川 正貴 (国立大学法人 愛媛大学大学院医学研究科 生体統御内科学)
演者 神田 善伸 (自治医科大学附属さいたま医療センター 血液科)
共催 MSD株式会社

CS-29 節外性DLBCLの治療

座長 木下 朝博 (愛知県がんセンター中央病院 血液・細胞療法部)
演者 富田 直人 (横浜市立大学大学院医学系研究科 病態免疫制御内科学)
共催 全薬工業株式会社

CS-30 我が国の新しいガイドラインを踏まえた発熱性好中球減少症の治療戦略

座長 小松 恒彦 (帝京大学ちば総合医療センター 第三内科学)
演者 岩崎 博道 (福井大学医学部附属病院 感染制御部)
共催 大日本住友製薬株式会社

CS-31 濾胞性リンパ腫診療のクリニカルクエスチョン

座長 照井 康仁 (がん研有明病院 血液腫瘍科 血液腫瘍担当)
演者 伊豆津 宏二 (虎の門病院 血液内科)
共催 シンバイオ製薬株式会社/エーザイ株式会社

CS-32 後天性血友病の診断と治療戦略

座長 家子 正裕 (北海道医療大学 歯学部 内科学講座)
演者 日笠 聡 (兵庫医科大学 血液内科)
共催 バクスター株式会社

CS-33 慢性ITP治療におけるTPO受容体作動薬の位置付け

座長 池田 康夫 (早稲田大学理工学術院 先進理工学部生命医科学科)
演者 富山 佳昭 (大阪大学医学部附属病院)
共催 協和発酵キリン株式会社

CS-34 鉄過剰症治療最前線 ～治療の最適化に向けて～

座長 澤田 賢一 (秋田大学医学部 内科学第3講座 (第3内科))
演者 鈴木 隆浩 (自治医科大学 内科学講座血液内科学部門)
共催 ノバルティス ファーマ株式会社

CS-35 The role of thalidomide in induction, consolidation, and maintenance of myeloma

座長 服部 豊 (慶應義塾大学薬学部)
演者 Gareth J. Morgan (Sections of Haemato-Oncology Research Unit, Division of Molecular Pathology, Institute of Cancer Research, and The Royal Marsden National Health Service, UK)
共催 藤本製薬株式会社

コーポレートパートナー

ノバルティス ファーマ株式会社



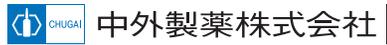
協和発酵キリン株式会社

KYOWA KIRIN

ヤンセン ファーマ株式会社



中外製薬株式会社



Roche ロシュグループ

ファイザー株式会社



ブリストル・マイヤーズ株式会社



セルジーン株式会社



Meiji Seika ファルマ株式会社

明日をもっとすこやかに



MSD 株式会社



サノフィ・アベンティス株式会社



全薬工業株式会社



日本新薬株式会社



大日本住友製薬株式会社



バイエル薬品株式会社



アステラス製薬株式会社



イーザイ株式会社



アレクシオンファーマ合同会社



グラクソ・スミスクライン株式会社



塩野義製薬株式会社



藤本製薬株式会社



旭化成ファーマ株式会社



大正富山医薬品株式会社



バクスター株式会社



株式会社ヤクルト本社



日本臓器製薬株式会社

